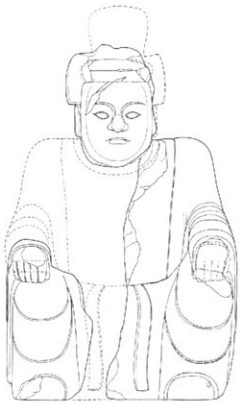
柳瀬比賣神社石造物報告



－ 氷見薮田石製 中世石造物の一括発見 －

2016年7月

富山県砺波市教育委員会

石造物が出土した奥殿基礎部分

出土した石造物群

地蔵菩薩立像

地蔵菩薩立像（万遊寺）

序

平成25年4月、文化財担当者あてに電話が鳴りました。柳瀬の比賣神社で工事中に石造物らしきものが出土したという報せです。慌てて現場に駆けつけると、白く風化した石造物がゴロゴロと横たわっていました。まさに寝耳に水の発見でした。

すぐさま専門家による調査を行い、実測図を取ることができました。石造物は随身坐像、狛犬、阿弥陀如来坐像、円形・六角形蓮華座、地蔵菩薩の計11体にのぼります。すべて氷見灘浦産の荻田石で出来ており、造像時期は14～15世紀とみられます。それらがこの地にもたらされたのは明治末年の神社合祀に伴って比賣神社へ移され、埋められたと考えられます。

この石造物は発見された年の間に比賣神社奥殿の新しい基礎に埋められ、今となっては見ることができません。しかし、調査で得られた成果は本書にまとめられています。今後、地域の歴史資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、比賣神社宮司や氏子総代様をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成28年7月

砺波市教育委員会

教育長　山本　仁史

例　言

1　本書は、平成 25 年（2013）4 月に砺波市柳瀬地内にある比賣神社（砺波市柳瀬 726）で発見された石造物の報告である。

2　調査は、比賣神社氏子総代の協力を得て、砺波市文化財保護審議会職務代理 尾田武雄及び同委員 西井龍儀が中心となって実施した。調査は平成 25 年 4 月に実施した。平成 27 年までに追加調査を行い、報告書を作成した。調査に際しては氷見市立博物館の大野 究氏の協力を得た。

3　本書の執筆及び図版作成は尾田と西井が行い、編集は砺波市教育委員会 主任 野原大輔が担当した。執筆分担は各文末に記した。また、富山民俗の会の佐伯安一氏と大野氏から玉稿を賜った。記して謝意を表したい。

4　調査期間を通じて、下記の方々から多大なるご教示・ご協力を得た。記して衷心より謝意を表する。

安念 幹倫（富山県埋蔵文化財課センター所長）
大野　究（氷見市立博物館館長補佐）
黒田 紀昭（柳瀬比賣神社宮司）
今藤 好介（砺波市土地改良区理事）
佐伯 安一（富山民俗の会）
堺井 善兵衛（柳瀬比賣神社氏子総代会長）
澤村 勝平（柳瀬地区）
白江 秋広（前となみ散居村ミュージアム館長）
杉崎 貴英（帝塚山大学准教授）
高原　徹（砺波郷土資料館館長）
武波 勇二（柳瀬地区自治振興会長）
田嶋 光範（砺波市土地改良区柳瀬地区委員）
平岡　隆（下中条比賣神社宮司）
北条 康丸（光證寺住職）
北条 裕四郎（正楡寺の湯）
干田 喜好（柳瀬比賣神社氏子総代事務局長）
安力川 恵子（砺波郷土資料館主任学芸員）
山本 富夫（前柳瀬比賣神社氏子総代会長）
山本 正喜（前柳瀬比賣神社氏子総代会事務局長）　　以上、五十音順・敬称略

目　次

序　文
例　言
目　次
序　章　般若野荘の歴史的環境　野原 大輔　1
第２章　石造物の発見経緯　尾田 武雄　5
第３章　石造物の概要　西井 龍儀　9
1　随身坐像　9
2　狛犬　9
3　阿弥陀如来坐像　10
4　円形蓮華座・受花　10
5　六角形蓮華座・反花　10
6　地蔵菩薩立像　10
第４章　考　察　25
1　石造物の類例　西井 龍儀　25
2　砺波周辺の薮田石製石造物　26
3　石造物の造像時期　28
4　氷見から見た今回の発見　大野　究　39
第５章　石造物発見の意義　尾田 武雄　43
第６章　まとめ　佐伯 安一　59
報告書抄録

図版目次

図 1.1　般若野荘周辺の遺跡地図
図 2.1　柳瀬比賣神社
図 2.2　奥殿の覆屋を解体した状況
図 2.3　奥殿基壇
図 2.4　石造物の出土状況
図 2.5　石造物の出土状況
図 2.6　石造物の出土状況
図 2.7　石造物の出土状況
図 2.8　堀り上げられた石造物群
図 2.9　掘り上げられた石造物群
図 2.10　掘り上げられた石造物群
図 2.11　元に戻された石造物群
図 2.12　元に戻された石造物群
図 2.13　元に戻された石造物群
図 2.14　石造物群
図 2.15　石造物群
図 2.16　石造物群
図 2.17　石造物群
図 2.18　奥殿
図 2.19　新しくなった奥殿覆屋
図 2.20　奥殿基壇下
図 2.21　奥殿基壇
図 3.1　柳瀬比賣神社随身挫像　左大臣（阿像）
図 3.2　柳瀬比賣神社随身挫像
　左：左大臣（阿像）　右：右大臣（吽像）
図 3.3　柳瀬比賣神社随身挫像　右大臣（吽像）
図 3.4　柳瀬比賣神社　狛犬・阿形
図 3.5　柳瀬比賣神社　阿弥陀如来坐像、蓮華座組み合せ
図 3.6　柳瀬比賣神社　円形蓮華座、六角形蓮華座
図 3.7　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像 1
図 3.8　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像 2
図 3.9　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像 3
図 3.10　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像 4
図 3.11　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像 5
図 3.12　柳瀬比賣神社（万遊寺）　地蔵菩薩立像 6
図 3.13　柳瀬比賣神社　石造物の破損・欠損状況 1
図 3.14　柳瀬比賣神社　石造物の破損・欠損状況 2
図 4.1　正権寺の湯にある地蔵菩薩坐像
図 4.2　薮田石随身類例
図 4.3　薮田石産出地と柳瀬比賣神社石造物類例地
図 4.4　薮田石随身類例
図 4.5　柳瀬比賣神社石造物写真
図 4.6　阿弥陀如来と六地蔵菩薩類例
図 4.7　薮田石阿弥陀如来・六地蔵菩薩類例
図 4.8　祖泉地蔵菩薩半跏坐像
図 4.9　庄元雄神神社　地蔵菩薩坐像
図 4.10　下中条比賣神社　地蔵半跏坐像
図 4.11　西部金屋 光證寺 地蔵菩薩半跏坐像
図 5.1　太郎兵衛観音（太田萬福寺に安置）
図 5.2　カンノンダ（観音田）位置図
図 5.3　地蔵堂位置図
図 5.4　旧二階堂宮位置図
図 5.5　万遊寺境内の観音堂
図 5.6　石造物の移動図
図 5.7　中央に阿弥陀如来が安置
図 5.8　旧般若野荘における中世の宗教環境図
図 5.9　旧般若野荘の如来形石仏
図 5.10　旧般若野荘内の如来形石仏の分布
図 5.11　法泉寺塔・板碑実測図
図 5.12　庄川町三谷にあった板石塔婆

表目次

表 1.1　般若野荘の出来事
表 1.2　般若野荘周辺の中世遺跡一覧
表 4.1　柳瀬比賣神社奥殿基壇埋納石造物
表 4.2　薮田石と岩崎石の石造物と年代
表 5.1　柳瀬比賣神社石造物関係年表
表 5.2　般若野荘から移転・移動した寺院
表 5.3　旧般若野荘における薮田石地蔵一覧
表 5.4　旧般若野荘における如来形石仏
表 5.5　「正徳二年社号帳」による五社と五社権現の
　一覧表

序章　般若野荘の歴史的環境

はじめに

柳瀬比賣神社で発見された中世石造物を理解するため、その前提となる中世の歴史的環境について考古学的情報を基に整理しておきたい。

1　般若野荘の概要

徳大寺家領般若野荘は、砺波平野東部に広く展開し、現在の庄川両岸に沿って南は砺波市庄川町三谷地区から北は高岡市中田地区に及ぶ広大な荘域であった。徳大寺公能が越中国守となった大治元年（1126）頃に荘園が成立したと推定されている*。般若野荘では治承・寿永の源平争乱や承久の乱で戦闘が行われている。

嘉吉元年（1441）、「薩戒記」によると徳大寺公有が越中の荘園経営の不振に陥っている。庚永元年（1342）に般若野荘の南にある三谷寺が鎌倉覚園寺塔頭蓮華院領となっていることや、武家方の地頭方により押領が起こりやむなく領地を折半する（下地中分）という事態に起因する。明応3年（1494）には越中国の徳大寺家領荘園が不知行となっている。天文14年（1545）、越中に下向した徳大寺実通は、知行分にて殺害される。雄神荘の庄城（壇城、壇ノ城）に拠る石黒氏や増山城の神保氏、在地荘民のいずれの手によるものか不明であるが、家領荘園での混乱状況をうかがうことができる。安川の般若山薬勝寺の南にある公卿九人塚という五輪塔の墓地は、実通に関係があるとの伝承がある。

2　荘域周辺の遺跡

般若野荘の考古学的な動態を把握するため、中世に属する周知の埋蔵文化財包蔵地を84遺跡抽出した。範囲は荘域内及びその周辺までとしている。遺跡の種別の中でもっとも多いのは散布地であるが、これは性格不明のものが大半を占める。他には、集落・城館・社寺・墓・塚等があり、それぞれについて概観する。

表 1.1　般若野荘の出来事

西暦	年号	出来事
1183	寿永2	平氏、般若野で敗れる（治承・寿永の源平争乱）
1221	承久3	般若野の合戦（承久の乱）
1362	貞治元	二宮円阿が和田城を警固する
1393	明徳4	足利義満、般若野荘領家方の守護使不入を保証
1412	応永19	東大寺造営の棟別銭が般若野荘に課される
1456	康正2	般若野荘に造内裏段銭が課される
1474	文明6	徳大寺実淳、越中へ下向
1494	明応3	徳大寺家領が不知行となる
1506	永正3	長尾能景、芹谷野合戦で討死する
1545	天文14	徳大寺実通、般若野荘で殺害される

（1）集落

集落遺跡では比賣神社にもっとも近い久泉遺跡（25）**をはじめ、秋元窪田島遺跡（24）***、徳万頼成遺跡（51）****がある。久泉遺跡では12世紀末～13世紀初頭、14世紀の2時期に遺構・遺物の集中期が認められる。方形土坑群を中心に建物や石組建物が存在し、荘園経営時の集落の様相の一端が明らかとなった。注目すべきは、遺跡の存続時期である。領家方と地頭方で下地中分がなされ、荘園が不知行となる15世紀を迎えると集落内での活動が停滞する。逆に秋元窪田島遺跡では15世紀にその中心があり、掘立柱建物・溝・土坑などが見つかっている。両遺跡は南北に近接することから、勢力の移動も考えられる。柳瀬比賣神社はこの2遺跡に挟まれた位置にあり、場所も近い。石造物の造立背景を考える時、これらの遺

* 砺波市史編纂委員会 1991「徳大寺家領般若野荘について」『砺波市史資料編1　考古、古代・中世』

** 砺波市教育委員会 2004『久泉遺跡発掘調査報告Ⅰ』、同 2008『久泉遺跡発掘調査報告Ⅱ』

*** 砺波市教育委員会 1990『秋元遺跡発掘調査報告書』

**** 砺波市教育委員会 2009『徳万頼成遺跡発掘調査報告Ⅰ』

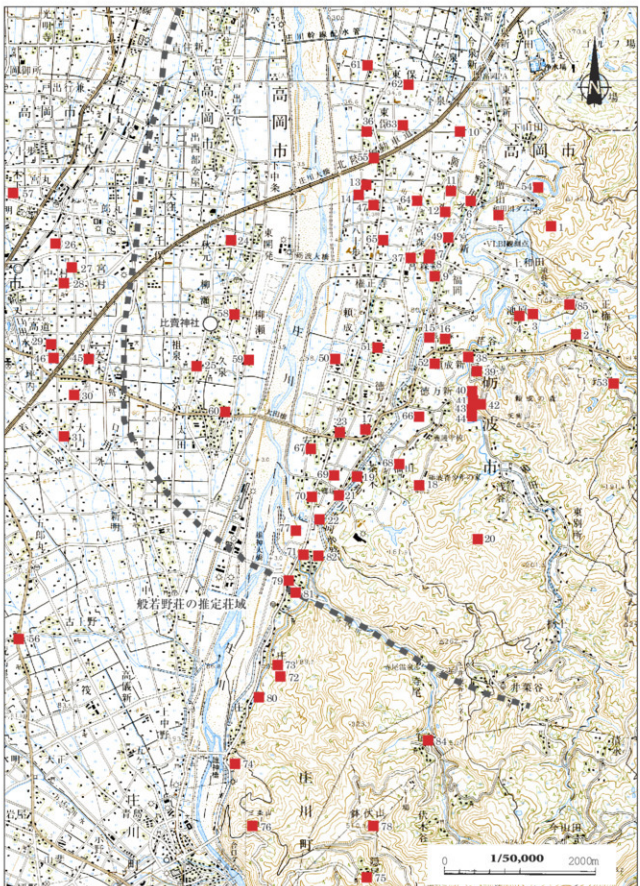


図 1.1　般若野荘周辺の遺跡地図

表 1.2　般若野荘周辺の中世遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	種別	時代
1	増山城跡	増山	山城	縄文・弥生終・古代・中世・近世
2	頓成B遺跡	頓成	散布地	縄文・古代・中世
3	狐塚遺跡	池原	散布地	中世
4	狐塚	池原	その他（塚）	中世
5	増山遺跡	増山	散布地・窯・集落	縄文前・縄文中・縄文後・奈良・平安・中世・近世
6	増山西遺跡	増山	散布地	古代・中世・近世
7	宮森新北島Ⅰ遺跡	宮森	散布地・集落・城館	縄文前・縄文中・縄文後・奈良・平安・中世・近世
8	光明真言塚	宮森	経塚	中世
9	厳照寺境内遺跡	福岡	墓	中世
10	東保石坂遺跡	東保字石坂・高岡市	散布地	縄文・古代・中世
11	行者塚	東保字石坂・高岡市	その他（塚）	中世
12	宮森廃寺	宮森	社寺	中世
13	東保般若堂跡	東保字高池	社寺	中世
14	高坪遺跡	八十歩	散布地	古代・中世
15	長尾為景塚	頓成新	その他（塚）	中世
16	長尾能景塚	頓成新	その他（塚）	中世
17	徳万遺跡	徳万	散布地	縄文・古墳・中世
18	福山 No.2 遺跡	徳万	散布地	中世
19	薬勝寺遺跡	安川字山下	散布地・墓	古代・中世
20	安川城跡	塩谷	城館	中世
21	公卿九人塚	安川	その他（石造物）	中世
22	安川野武士A遺跡	安川字野武士	散布地	古代・中世
23	安川二日遺跡	安川字二日	散布地	中世
24	秋元窪田島遺跡	秋元字窪田島	散布地	古代・中世・近世
25	久泉遺跡	久泉	散布地・官衙・集落	縄文・古代・中世・近世
26	堀内遺跡	堀内	散布地	中世
27	宮村遺跡	宮村	散布地	古代
28	中村イシナダ遺跡	宮村	散布地	古代・中世
29	花総合センター内遺跡	高道	散布地	縄文・奈良・平安・中世
30	庄下館跡	矢木・坪内	城館	中世
31	大門遺跡	大門	散布地	中世
32	館の土居跡	東保	城館	中世
33	宮森遺跡	宮森	散布地	縄文・中世
34	芹谷下大門遺跡	芹谷	散布地	中世・近世
35	千光寺遺跡	芹谷	社寺	中世・近世
36	日宮跡	芹谷	社寺	中世
37	日宮南遺跡	芹谷	窯・その他	中世
38	金毘羅山遺跡	芹谷	散布地	中世
39	生玉明神北遺跡	芹谷	窯	中世
40	生玉明神跡	芹谷	社寺	中世
41	八咫烏神社遺跡	矢木	散布地	中世
42	高道向島遺跡	高道・八木	集落	古代・中世
43	八十歩遺跡	八十歩	散布地	縄文・中世・近世
44	宮森新北島Ⅱ遺跡	宮森新北島	散布地	縄文・中世
45	頓成川原遺跡	頓成	散布地	中世
46	頓成遺跡	頓成・徳万	集落	縄文・古墳・古代・中世・近世
47	三合新芹谷遺跡	三合新・芹谷	散布地	縄文・中世・近世
48	坪野遺跡	坪野	散布地	中世
49	増山裏亀山遺跡	増山	散布地・集落	中世
50	東保遺跡	東保	散布地	縄文・平安・中世・近世
51	笊高屋遺跡	笊高屋	散布地	古代・中世・近世
52	木下遺跡	木下	散布地	古代・中世
53	柳瀬遺跡	柳瀬	散布地	古代・中世
54	柳瀬久遠寺遺跡	柳瀬	散布地	古代・中世
55	太田北遺跡	太田	散布地	中世
56	東保北遺跡	東保字田中	散布地	縄文・古代・中世
57	東保田中遺跡	東保字田中	散布地	古代・中世
58	東保大坪遺跡	東保字大坪	散布地	縄文・古代・中世
59	宮森道川島遺跡	宮森	散布地	古代・中世
60	宮森西島遺跡	宮森	散布地	古代・中世
61	三合宗九郎島遺跡	三合	散布地	古代・中世
62	安川宮村遺跡	安川	散布地	古代・中世
63	福山遺跡	福山	散布地	古代・中世
64	安川正守遺跡	安川	散布地	古代・中世
65	安川野武士遺跡	安川	散布地	古代・中世
66	西住塚	三谷字村中	その他	中世？
67	宗平塚	庄字一ノ谷	その他	中世？
68	恩光寺跡	庄字一ノ谷	社寺	中世
69	増城跡	庄字上増	散布地・城館	縄文・古代・中世
70	隠尾城跡	隠尾	城館	中世
71	千代ヶ様城跡	庄	城館	中世
72	三谷北遺跡	三谷	散布地	弥生・古代・中世
73	鉢伏山城跡	鉢伏山	城館	中世
74	三谷上野塚	三谷	その他	中世
75	庄遺跡	庄川町庄	散布地	中世
76	三谷東遺跡	庄川町三谷	散布地	中世
77	三谷北遺跡	三谷	散布地	弥生・古代・中世
78	鉢伏山城跡	鉢伏山	城館	中世
79	三谷上野塚	三谷	その他	中世
80	庄遺跡	庄川町庄	散布地	中世
81	三谷上野遺跡	庄川町三谷上野	散布地	中世
82	三谷東遺跡	庄川町三谷	散布地	中世
84	五谷遺跡	五谷	散布地	中世
85	正権寺遺跡	正権寺	散布地	古代・中世

跡との関連を視野に入れておかねばなるまい。

徳万頼成遺跡では詳細な年代の特定はできないが、道路状遺構とともに中世の掘立柱建物が 4 棟確認されている。

集落遺跡の調査例が少ないので総括的な議論はできないが、特徴としては遺跡ごとに時期に偏りがあるものの、荘域全体としては中世の前期から後期にかけて万遍なく遺跡が存在する。偶然にも久泉遺跡・秋元窪田島遺跡・柳瀬比賣神社は同じ微高地上に立地する。この微高地が荘域においてある程度の勢力を持つ地域であった可能性がある。

また荘域外にある油田条の動向も見ておく必要がある。高道向島遺跡（46）では、12 世紀末から堀立柱建物を伴う集落が営まれたことが判明しており、般若野荘と同じく油田条も早い段階から開発の手が及んでいたことがわかる。

（2）城館

荘域内の城館は、増山城跡（1）、館の土居跡（36）、安川城跡（20）、宮森新北島Ⅰ遺跡（7）がある。増山城跡は南北朝の動乱期である康安 2 年（1362）に和田城として登場し、長く越中守護代神保氏の拠点として栄えた後、

一向一揆・上杉・佐々・前田の諸勢力・諸氏の支配となった。盛衰はあるものの 14 世紀後半から 17 世紀初頭まで連綿と機能しており、隣接する般若野荘に影響を与えた。城下町は考古学的に見ると 14 世紀には珠洲等の遺物がみられるが、盛期は 16 世紀末～ 17 世紀初頭である。寺伝による開基年代を見ると、西養寺 1373 年、妙蓮寺 1470 年、恩光寺 1485 年、長念寺 1531 年など 14 世紀後半から 16 世紀初頭にかけて盛期を迎え、考古年代より若干古い傾向を示す。

館の土居は「般若郷」の地頭多智民部大輔政道の館と伝わる居館跡で、16 世紀に入ると神保氏による領域支配が進む中で没落したという。安川城跡は般若野荘荘官黒田太左衛門尉が領主に反抗して、悪党を従えて立て籠もったと伝わる。黒田は長禄年間（1457 ～ 1460）に徳大寺実淳から荘官に任じられており、その後の反抗は 15 世紀末に徳大寺領が不知行となる混乱の一様相を示しているのかも知れない。

（3）社寺

荘域内における社寺は少なく、考古学的には千光寺遺跡 (39)、芹谷下大門遺跡 (38)、日宮跡 (40)、宮森廃寺 (12)、東保般若堂跡 (13)、生玉明神跡 (44) がある。大宝 3 年 (703)、天竺僧法道円徳上人が開いたとされる千光寺は、真言の古刹として名高いが、現在地に移ったのは主軸線の方位から江戸時代中頃と考えられる*。それに先行する伽藍は芹谷下大門遺跡とみられ、地中レーダ探査では建物の礎石とみられる反応を確認している**。

荘域の寺院遺跡で多くの情報を提供するのは、宮森廃寺である。ここからは耕作中に水田から独鈷杵、金剛盤、灑水器、塗香器、閼伽桶、提子の 6 器種 9 点*** の密教法具が発見されている。遺物は型式的には 15 世紀前後とみられ、伝承にある真言の大道場・法光山水精寺の関わりを指摘する見方もある。

（4）墓・塚

墓や塚としては、、狐塚 (4)、光明真言塚 (8)、厳照寺境内遺跡 (9)、行者塚 (11)、長尾為景塚 (15)、長尾能景塚 (16)、薬勝寺遺跡 (19)、公卿九人塚 (21)、生玉明神北遺跡 (43)、東保遺跡（東保高池遺跡）(55)、西住塚 (71)、三谷上野塚 (79) などがある。

注目すべきは東保遺跡 (55)**** である。東保遺跡はかつて東保高池遺跡の名で知られた遺跡で、多量の土師器皿や焼けた粘土塊が出土した。土師器皿は、非ロクロ成形によるもので口縁部を一段ナデ面取り手法で処理している。年代は 13 世紀前半頃に位置付けられる。多量の土師器が集中して出土したため、土器の生産跡との見方もあったが、土師器は北野天神縁起に見る盛飯（飯鬼）皿に通じることから、火葬墓との関連が示唆される。

正権寺遺跡では方形配石遺構が見つかっており、建築物の礎石や配石墓と推定されている。土師器皿や珠洲の年代は 15 世紀後半と見られる。珍しいものとして 15 世紀後半とみられる銅製燭台が出土している。これが配石墓であれば荘域内で唯一の例となる。

（5）窯

中世の窯跡はあまり確認されておらず、生玉明神北遺跡、日宮南遺跡の 2 遺跡しか知られていない。

3　小結

般若野荘の遺跡動向を概観してきたが、幾つかの傾向が看守される。少なくとも 12 世紀末～ 13 世紀初頭には集落や墓が営まれ、荘域内での活動が始まる。14 世紀には集落が継続されるが、荘域北東に隣接する丘陵部に増山城が築かれ、寺院が集中的に造営されるという大きな動きがある。15 世紀になると般若野荘は大きな動乱期迎える。その引き金は 14 世紀後半に領家方と地頭方で土地を折半する下地中分と思われるが、久泉遺跡・秋元窪田島遺跡にみられる勢力の移動や宮森廃寺の廃絶、安川城での荘官立て籠もり事件などは混乱の一端を示す可能性がある。荘域内での混乱を尻目に増山城下では着々と城と町の整備が進む印象である。　（野原大輔）

* 酒井英男他 2014「千光寺の方位の研究」『越中真言の古刹芹谷山千光寺誌』

** 同上「千光寺旧伽藍における地中レーダ探査」

*** 砺波市史編纂委員会 1991「六、中世」『砺波市史資料編 1　考古、古代・中世』

**** 舟崎久雄 1973『砺波市東保高池遺跡発掘調査概報』砺波市教育委員会、砺波市史編纂委員会 1991「六、中世」『砺波市史資料編 1　考古、古代・中世』

第２章　石造物の発見経緯

はじめに

砺波市柳瀬に鎮座する比賣神社は、古来延喜式内社の論社とされ、中世期には徳大寺家領般若野荘域内にある。集落の南北に旧道中筋往来が走り、広々とした境内は杉林に囲まれている。

柳瀬の地名は万遊寺の阿弥陀如来絵像裏書に「文亀元年（1501）３月15日」の日付が初見である。ちなみに隣村の太田は『金子文書』に「天正17年（1589）」である。宮永正運著『越の下草』(天明６年（1786）)には、「柳瀬千軒」の市があったとされ、杉木新町（出町）の町立ての願書が慶安２年（1649）には、「杉木町は三と九の六斉市にしたいが、この日は付近の戸出・中田・柳瀬の市とはさしあいません」と記されている。現在柳瀬地区には東町・中町・西町・新町の地名が残り、町川もある。砺波郡下川崎村出身の宮永正運が天明６年に著した『越の下草』には次のような記事がある。

一、般若野郷柳瀬村は、往古人家千軒ありて柳瀬の市ありといふ。大同年中此市はしまりより、世々栄昌の地なりとて、今猶柳瀬町といふ処ありて、さいみの布を織るを女の業とせり。此布を売るに月々市日ありて品々交易するなり。産土神の杜は昔より市姫の神なりといふ。

人家千軒とややオーバーな表現であるが、こんな伝承を残す因もあったのであろう。

上流部の太田の住吉神社には奈良時代の須恵器が出土し、祖泉・久泉集落があり縄文・奈良・平安・中世などの複合遺跡が広がっている。下流部には東開発、下中条、西部金屋などにも遺跡がある地域である。また奈良時代、越中の砺波・射水・新川郡内に奈良東大寺の荘園が数多く設置されたが、礪波郡伊加流伎荘は柳瀬地区も比定地に含まれている。比賣神社奥殿の基壇から、南北朝時代の石造物が発見されても不思議ではない地域でもある。

奥殿改修工事と石仏調査

比賣神社奥殿改修工事の計画が立ち上がり、平成23年１月に本殿改修委員の選任が行われ、25年２月には地鎮祭をし、４月に奥殿の解体が行われた。４月19日に、奥殿基礎部分解体の際に土中に埋められていた石仏を、工事関係者や山本正喜氏子総代事務局長等が発見された。翌日20日に、山本正喜氏が拙宅を訪れられた。翌日21日に砺波市教育委員会に連絡し、野原大輔学芸員が調査され、簡単な報告書をまとめられた。その際に石仏には関係ないが覆屋の柱に「明治四十四年十二月九日　藤井助之丞」と墨書があることが発見された。藤井助之丞は国指定重要文化財厳浄閣や砺波市指定文化財旧中越銀行本店、千光寺書院などを建築した明治の名工である。

さて石仏の調査は４月28日には砺波市文化財審議委員会委員西井龍儀による調査が緊急に行われ、その後大野宪氷見市立博物館館長補佐らの協力を得て実測図の作成などが行われた。６月２日には柳瀬地区民に対して、石仏の現地説明会が行われ多くの参加を得た。その間マスコミ各社も報道されて注目を浴び、石仏保存に向けて模索された。７月31日には上棟式が行われ、奥殿改修工事は９月30日に完成した。祝賀会は比賣神社祭礼日

図 2.1　柳瀬比賣神社

である 11 月 1 日に行われた。

石造物は、元あった奥殿下の基礎部分に丁寧に埋め戻されることになった。その後関連石仏として、平成 26 年 8 月 31 日に柳瀬にある真宗大谷派万遊寺の地蔵菩薩、同年 12 月 20 日に下中条の比賣神社、27 年 10 月 24 日に元雄神神社の石仏の調査を西井龍儀が行った。

現状と保存

今回、柳瀬比賣神社奥殿改修工事の際に薮田石製の地蔵菩薩五体、阿弥陀如来坐像一体、随身（左右）一対、狛犬阿形一体、円形と六角形の台座各一箇などが見つかった。それぞれ南北朝期の制作と思われ、その発見は衝撃的で驚きも持って注目された。その一方保存の方法も模索され、信仰の対象物である石造物が奥殿基壇下に、なぜ埋められていたのかの疑問が解けないままであった。氏子総代の方々も先祖が、深く思慮された行為であろうということで、それを尊重して元に戻されたのであろうと推察される。

またこれら大量の石造物群を保管する経済的な余裕と、場所の問題などがネックとなったのも事実であろう。しかし奥殿基壇に納められた石造物群は丁寧に扱われ、整然と並べられ、その上から玉砂利を敷き詰め、保存された。これが信仰の対象物である石造物に対し、現状での最善の方策であったと思われる。

（尾田武雄）

図 2.2　奥殿の覆屋を解体した状況　H25.4.19 撮影

図 2.3　奥殿基壇　H25.4.19 撮影

図 2.4　石造物の出土状況（撮影 山本正喜氏）H25.4.19 撮影

図 2.5　石造物の出土状況（撮影 山本正喜氏）H25.4.19 撮影

図 2.6　石造物の出土状況（撮影 山本正喜氏）H25.4.29 撮影

図 2.7　石造物の出土状況（撮影 山本正喜氏）　H25.4.29 撮影

図 2.8　掘り上げられた石造物群　H25.4.21 撮影

図 2.9　掘り上げられた石造物群　H25.4.21 撮影

図 2.10　掘り上げられた石造物群　H25.4.21 撮影

図 2.11 元に戻された石造物群（撮影 山本正喜氏）H25.4.21 撮影

図 2.12 元に戻された石造物群（撮影 山本正喜氏）H25.4.21 撮影

図 2.13 元に戻された石造物群（撮影 山本正喜氏）H25.4.21 撮影

図 2.14　石造物群　H25.4.29 撮影

図 2.15　石造物群　H25.4.29 撮影

図 2.16　石造物群　H25.4.29 撮影

図 2.17　石造物群　H25.4.29 撮影

図 2.18　奥殿　H27.2.11 撮影

図 2.19　新しくなった奥殿覆屋　H27.2.11 撮影

図 2.20　奥殿基壇下　H27.2.11 撮影

図 2.21　奥殿基壇　H27.2.11 撮影

第３章　石造物の概要

平成 25 年に奥殿基壇下から発見された石造物は随身坐像左大臣（阿像）・右大臣（吽像）各１、狛犬１、阿弥陀如来坐像１、円形蓮華座１、六角形蓮華座１、地蔵菩薩立像５の 11 個体がある。これにかつては地蔵菩薩立像と同一組成であったとみられる柳瀬地内万遊寺の地蔵菩薩立像１躯を加え、合計１２個体がある（表 4.1）。これらは何れも大きく破損し、欠損部分も多い（図 3.13、3.14）。

使用されている石材は全て灰白色の石灰質シルト岩で、薮田石とよばれているものである。この石は微粒砂岩ともよばれてきたことがあり、きめが細かく軟質部は加工し易い反面、水に弱く、風化し易い特性がある。破断面が剥離したり、角がとれて接合面にすき間が多いのはこの石質によるが、欠損部分が多いのは明治 44 年に基壇下へ埋納される以前、すでに欠落していたか、工事で掘り出された際に、形や加工が分かりにくい破片や砕片は、他の砂礫とともに廃棄された可能性がある。

随身坐像　（図 3.1 ～ 3.3）

随身は、左大臣、右大臣の二躯一対がある。何れも丸彫の坐像（倚像）で立膝の上に掌を置く。立膝の側面には倚子を表していないが、低い腰かけに坐すとみられる。

全体が分かる左大臣は、高い巾子と頭幅いっぱいの額、平たく大きい縰の冠をかぶり、見開いた目は正面を見すえ、口を開いて上下の歯を見せている。耳はＣ字状で上部が縰にかかる。巾子の両側面にはかんざし孔が穿たれているが別材のかんざしはなく、背面の纓は不明である。

顎下は首を見せず丸襟が巡り、広い肩幅の袍をつける。腹部の結び紐は、前面で交差して先が垂れる。肩側面下部に２条のＶ字状衣文を表し、膝上の手は袖口を見せる。袂裾は像下端から少しあけ、３条の衣文襞は後方へ湾曲している。立膝の表袴前面にも３条の衣文襞を表し、下端から丸沓先を出す。両手首の先を欠損するが、手は下向きに別材の弓を握っていたのであろう。衣文の彫成は線刻ではなく、流麗な波状断面である。

本像は冠の巾子と首、膝下で割れ、四分している。像高 77.3 ㎝、石質は薮田石である。

右大臣は頭部と左半身、右膝部分を残し他は大きく欠損している。冠は右側縁と額があり、巾子や左側縁、後頭部をなくしている。面相は目、眉、鼻を力強く彫り、口を固く結んで正面を見すえる。

左大臣との相違は肩をやや高く張り、腹部の紐先が下方へ垂れ交差しないこと、立膝の衣文が２条で袂側面の襞は３条とも直線的でやや後方に垂れることなどをあげうるほか、像高は右大臣が推定高さ約８１㎝で左大臣より高く、奥行は右大臣が小さい（表 4.1）。

狛犬　（図 3.4）

狛犬は阿形で、頭部と体躯上半身が残存し、前肢や体躯下半部、台座を欠損している。大きく口をあけ、目を丸く見開く。胸を張り、背中を丸めた坐形とみられる。たてがみは浅い肉彫りで、２段の巻毛を左右に振り分け、耳下の口元にも大きく巻毛を表す。顎下には蝶結び状の飾りがあり、下部に顎ひげを線刻しているが顎下の巻毛が変化したものであろう。耳は三ヶ月状に突出し、左耳は欠損するが、そこに補修枘穴がある。前肢付け根部の施毛があったかどうかは不明である。

狛犬の復元推定高さは約 64 ㎝と大きく、参道狛犬の大きさに匹敵する。

石造狛犬が早くから制作されている越前の笏谷石製狛犬は、15 世紀ころまでさかのぼると推定されており、在銘狛犬では永正 12 年（1515）の越前狛犬がある。16 世紀ころの狛犬はたてがみが３段から２段の房状巻毛で、姿勢は背中が四半円の弧状をなすことが報告されている*。県内では最も古い高岡市吉久神明社の小型越前狛

* 三井紀夫　2012「中・近世における越前狛犬の特徴と地方進出につ

犬は天文24年（1555）の刻銘があり、たてがみは2段の巻毛で、口元の巻毛や前肢付け根部の巻毛もある。また顎下の蝶結び状巻毛は福井市樺八幡神社の天文12年（1543）在銘狛犬がある*。

当狛犬の石質は藪田石であり、笏谷石の越前狛犬とは技術系譜や地域は異なるが16世紀ころの越前狛犬と共通点がみられる。

阿弥陀如来坐像　（図3.5）

阿弥陀如来坐像は肩口で上下に大きく割れ、舟形光背の上半部と、膝部分を欠損している。頭部は肉髻を大きく表し、長い耳と穏やかな尊顔の表情になる。白毫はなく、三道も省略しているが、膝上の掌は腹前で弥陀定印を結ぶ。偏袒有肩の衣をまとい、胸をあけた衣文は4条で両肩にかかる。彫成は厚肉彫で、衣文の一部に線刻がみられる。

舟形光背はやや前傾し、坐像の底面は平らで奥行もあり、安定性がある。本像には一体の蓮華座はなく、別石になる。

像高41.5㎝、奥行22.0㎝、光背の復元推定高さは48.5㎝と、随身坐像に比べ小ぶりである。

円形蓮華座・受花　（図3.5、3.6）

円形蓮華座は単弁12葉蓮弁を4段に重ねた重厚な受花座で、蓮弁は上の段がより幅広となっている。側面の一方に半円形の花弁状の浮き彫りがあり、これを正面側とみるが類例をみない。上面は平坦で、下面には浅い円形の枘穴がある。高さ16.5㎝、枘穴径7㎝、枘穴の深さは2㎝である。

六角形蓮華座・反花　（図3.5、3.6）

六角形蓮華座は約半分を欠損している。複弁6葉蓮弁で間弁があり、弁端の反り上がりが大きく力強い。反花の下に六角形の框がある。上面中央にはやや深い枘穴があり、円形蓮華座と、六角形蓮華座を上下の組合せとみた場合、その間に敷茄子座など別部品が介在したと考えられるが、その部品は不明である。高さ12㎝、受花径20㎝、枘穴径8.7㎝、枘穴深さは7.2㎝で框高さは2.8㎝である。

地蔵菩薩立像1～6　（図3.7～3.12）

地蔵菩薩立像は奥殿基壇下から出土した1～5と、万遊寺にある6の6軀があり、六地蔵を構成している。何れも舟形光背のある立像で、蓮華座上に直立する。蓮華座は上部が素弁九葉蓮弁に間弁がつく受花座で、下部は反花座となるが、蓮弁の表現はない。

舟形光背は頭部付近の幅が最も広く、頂部は残存部が少なく不明確ながら緩やかに尖るとみられる。光背と立像はやや前傾し、両足の爪先から蓮華座縁までをよく残し、蓮華座上端が奥行寸法の最も大きくなる位置である。蓮華座底面は水平で、窪みや枘はない。

地蔵菩薩立像5は頭部を欠損するが、他の頭部は何れも円頂で、後頭部への丸みまでを彫成する厚みのある浮き彫り、厚肉彫である。各部の彫成は次のようになる。耳は長く上部の巻耳端下部を鋭くV字状に彫り込む特徴がある。この特徴は各地蔵菩薩のみならず、阿弥陀如来や随身にもみられることから、それぞれが同一彫成、同時性を示唆する要因である。

額に白毫はなく、首の三道は地蔵1、2、6にみられるが、首付近での破損が多いこともあり、他は不鮮明である。

衣は両袖の袂を蓮華座まで垂れ下げており、衣文は胸元を大きくあけ、正面の衣文は7～8条の襞を表し、側面の袂襞は地蔵1、2、4が3条、地蔵3、5、6が5条の襞をV字状に表す。それぞれのV字状襞の断面は流麗な波状である。各地蔵の持物や印相は、地蔵1が右手に幡か、左手に宝珠を持し、地蔵2は手先を欠損するが合掌であろう。地蔵3は右手を下げ与願印とし左手に宝珠を持す。地蔵4は衣に隠れるが拱手とみられる。地蔵5は右手に錫杖で上半部を欠損する。左手も先端を欠損

いて」『若狭郷土研究』57の1

* 福井県立歴史博物館　2012　文化財センター公開展「越前狛犬越前青石（笏谷石）製の狛犬たち」（広生由起氏のご教示による）

するが宝珠であろう。６は組み合わせた両手に梵鐘をいただく。

地蔵菩薩立像の破損位置は１～３、５が肩先から首にかけて割れ、４は頭頂部と光背のほか膝でも上下に割れ、そのまわりも欠損している（図 3.14）。地蔵６は体躯の残存状況が最も良く、光背上縁が欠損している。地蔵４の蓮華座は破損、摩滅が著しく、顔面も剥離しているが、石質が脆い部分とみられる。このほか各地蔵の光背周縁

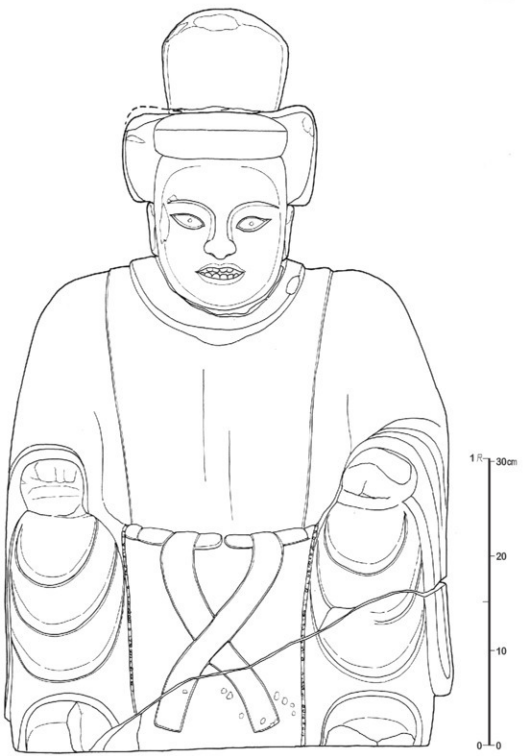


図 3.1　柳瀬比賣神社随身坐像　　左大臣（阿像）　　S=1:4

図 3.2　柳瀬比賣神社随身坐像　　左：左大臣（阿像）　右：右大臣（吽像）　　S=1:4

や蓮華座上縁に連接する欠損がある。これらの破損、欠損は、地蔵には台座に設置する枘がないことから設置環境にもよるが、倒伏や落下による破損、欠損や人為的な損壊が想定されるが特定できない。　（西井龍儀）

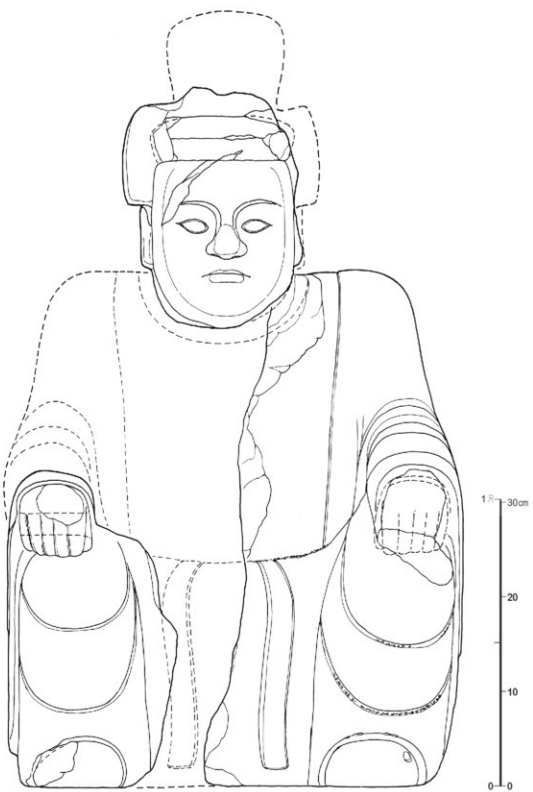


図 3.3　柳瀬比賣神社随身坐像　右大臣（吽像）　S=1:4

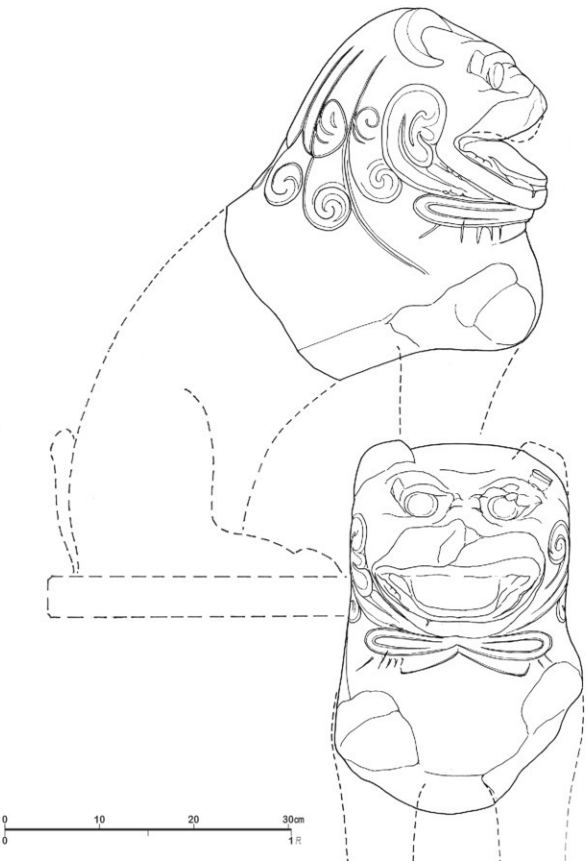


図 3.4　柳瀬比賣神社　狛犬・阿形　　S=1:4

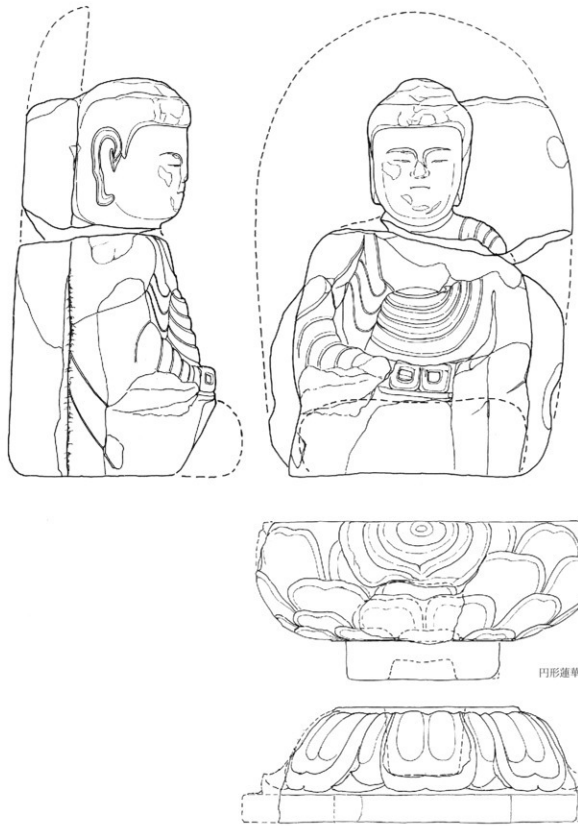
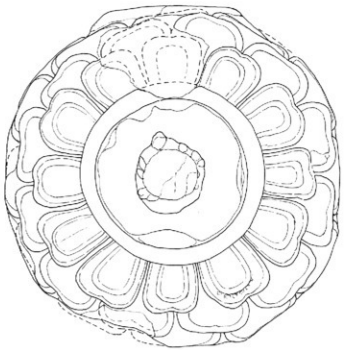
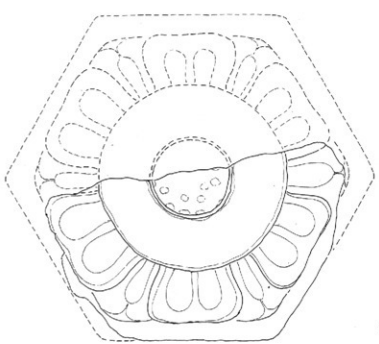


図 3.5　柳瀬比賣神社　阿弥陀如来坐像、蓮華座組み合せ　　S=1:4



円形蓮華座



六角形蓮華座

0　10　20　30cm
0　1尺

図 3.6　柳瀬比賣神社　円形蓮華座、六角形蓮華座　S=1:4

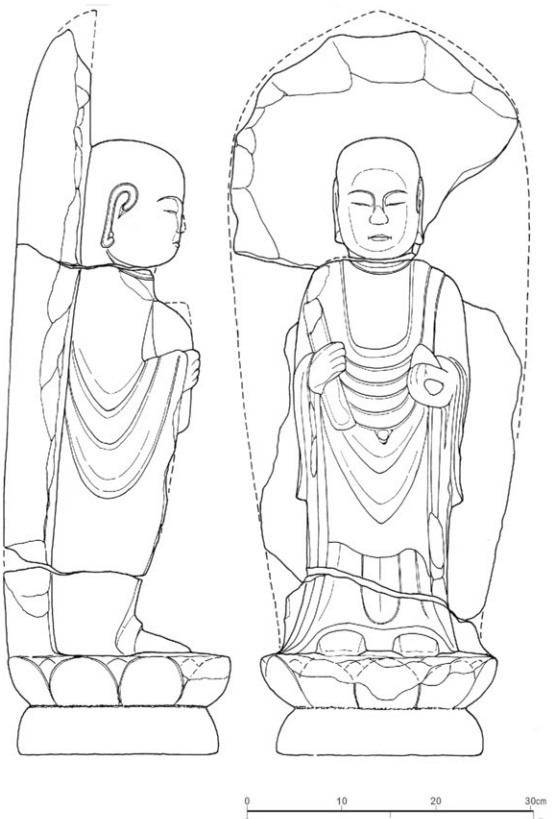


図 3.7　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像 1　　S=1:4

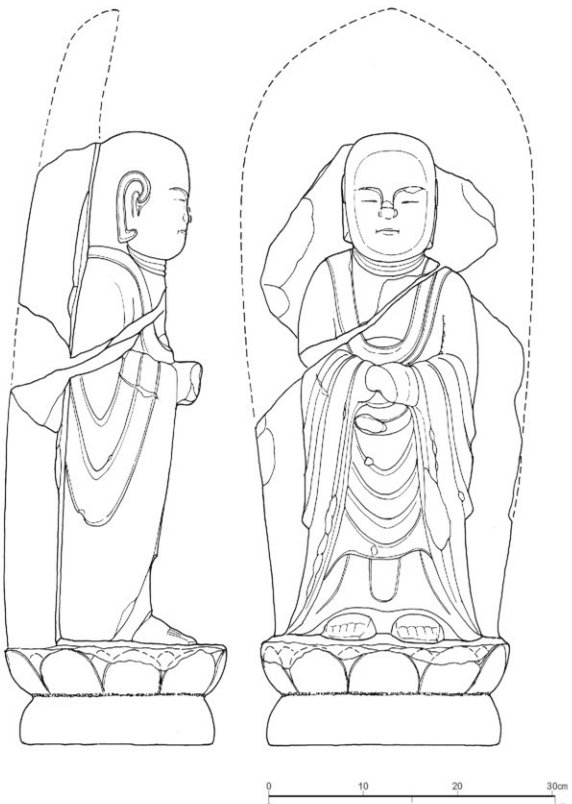


図 3.8　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像 2　　S=1:4

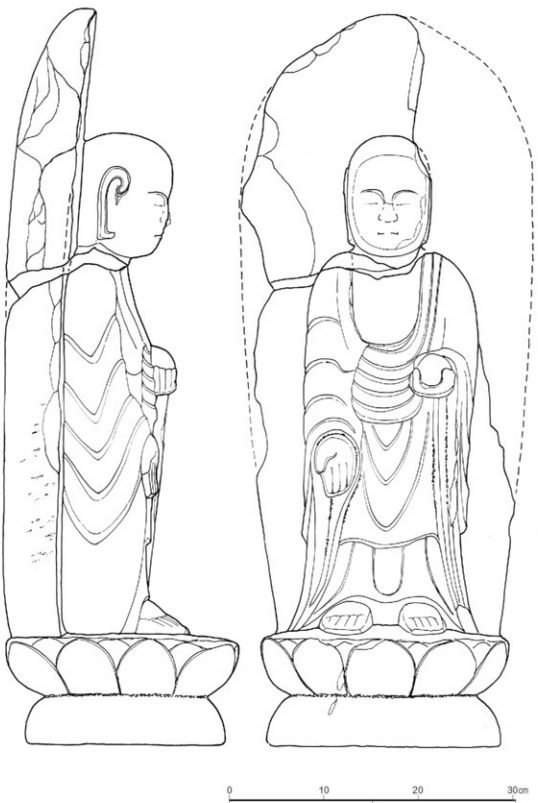


図 3.9　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像３　　S=1:4

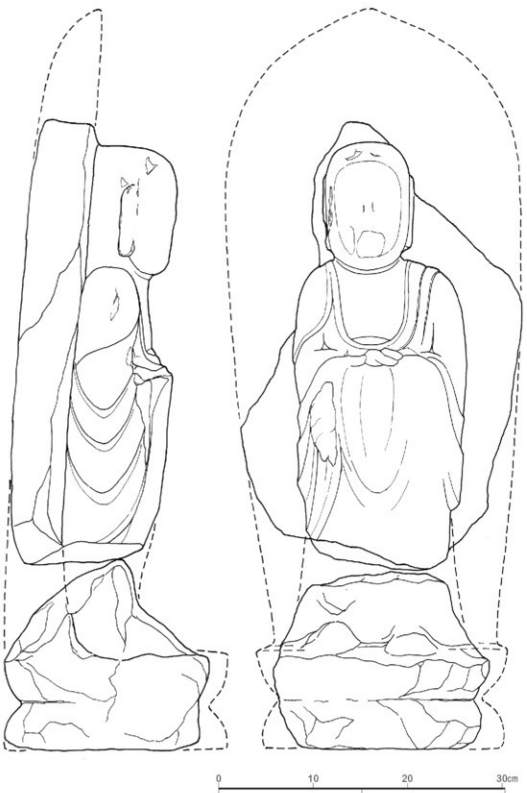


図 3.10　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像 4　　S=1:4

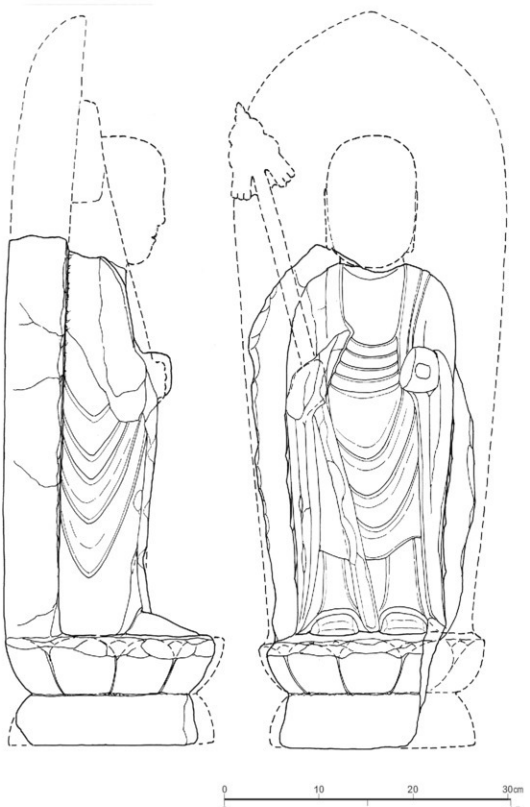


図 3.11　柳瀬比賣神社　地蔵菩薩立像 5　　S=1:4

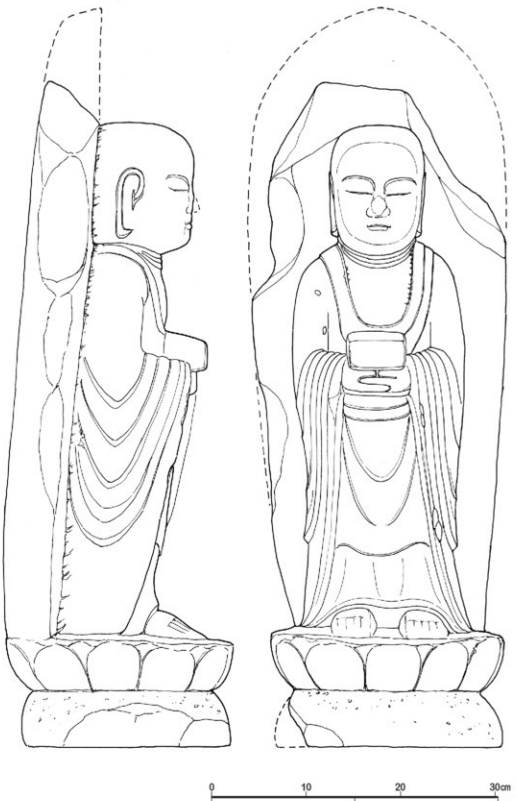


図 3.12　柳瀬比賣神社（万遊寺）　地蔵菩薩立像 6　　S=1:4

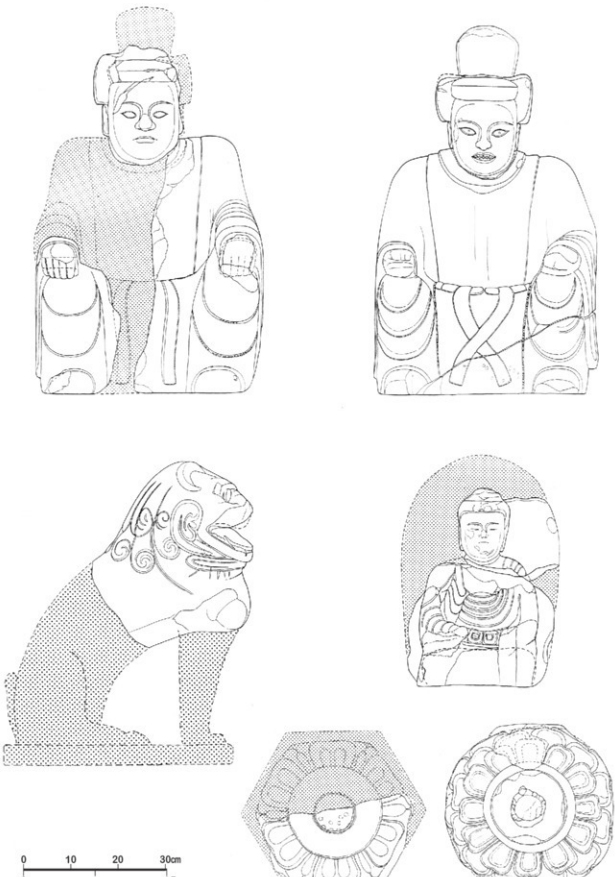


図 3.13　柳瀬比賣神社　石造物の破損・欠損状況１　随身、狛犬、阿弥陀如来坐像　S=1:8

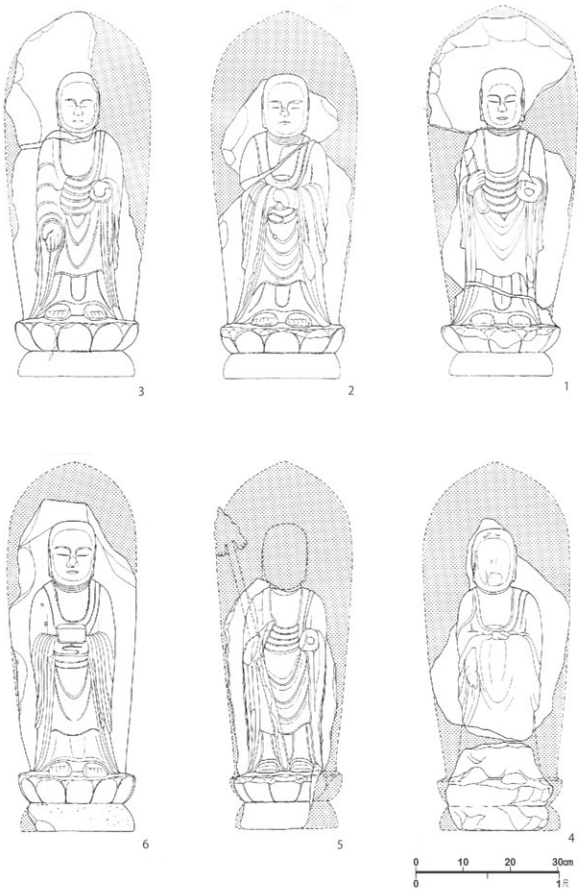


図 3.14　柳瀬比賣神社　石造物の破損・欠損状況 2　地蔵菩薩立像 1 ～ 6　S=1:8

第4章　考　察

1　石造物の類例

随身坐像　（図4.2、4.4）

薮田石製随身の類例は数少ないが、氷見市脇方今蔵神社と同市島尾の島尾神明社随身坐像がある*。このうち比賣神社随身と姿勢、像容、彫成が最も酷似するのは今蔵神社随身である（図4.2下）。これは左大臣（阿像）、右大臣（吽像）とも揃っており、比賣神社随身よりひとまわり大きく、像高は左大臣が88.5㎝、右大臣が87㎝で顎髭をつけ、実に堂々としている。欠損部分も少なく、比賣神社随身をさらに補完するところがある。

強いて相違点をあげるならば、左右随身の像高は比賣神社では残存部の肩高さからみて、右大臣が左大臣より高いのに対し、今蔵神社では左大臣が大きい。袍の腰紐は比賣神社随身では左右が逆になり、かつ交差する紐が比賣神社の左前に対し、今蔵神社では右前となっている。

このほか今蔵神社随身の背面に、冠の結び紐や腰紐を表すのに対し、比賣神社随身では不明である。また今蔵神社随身の眉や目、口には黒く墨入れし、顎髭をつけるが、比賣神社随身にはみられない。巨視的には比賣神社随身が今蔵神社随身より小ぶりで髭のないだけ若やいで見える。

このような相違は制作工人や制作場所の違い、さらには制作時期によるものかは判然としないが、薮田石の産出地において、同一の制作儀軌のもとに造像されたとみてよいであろう。

一方、島尾神明社の随身は二躯あるが、冠の巾子を欠損しているので像高は推定約60㎝と、比賣神社随身よりさらに小さく、摩滅や欠損部分が多い**。何れも右足を横にし、左足を立て膝とした片足立て膝の坐像で、冠の緌は極めて小さく、丸襟の袍を腹前で腰紐を蝶結びとし、やや開いた足の差貫を膝下で裾を締めるなど、今蔵神社や比賣神社の随身とは姿勢、彫成が相違する。しかし氷見市の二例は薮田石製の左右随身が配備されていることに意義があり、同様な随身が柳瀬比賣神社に遺ることは、習俗、信仰的関連からも注視される。

阿弥陀如来坐像と六地蔵菩薩立像　（図4.6、4.7）

阿弥陀如来坐像と六地蔵菩薩立像が組み合わさった類例として、黒部市北野石亀仏をあげることができる（図4.6）。石龕に使用されている石質は中粒砂岩で薮田石とはやや異なるが、内部の高さ43.3㎝、幅64.4㎝、奥行56㎝の狭い空間の奥壁には、蓮華座上の阿弥陀如来坐像と、両脇に観音菩薩立像と勢至菩薩立像を配し、前方側壁に蓮華座上の地蔵菩薩立像が三躯ずつ向き合う配置の六地蔵となっている。何れも板石から厚肉彫りされており、蓮華座は受花と反花からなり、蓮弁は確認できないが、壁を背に半円形平面の蓮台になる。

六地蔵の像容と持物は、右側奥から右手に長い錫杖と左手に宝珠を持ち、中央は合掌像である。右手前は腹前で下げた衣内に手を納めた拱手像とみられる。左側奥は左手に宝珠を持ち、右手を下げ手の平を見せる与願印で、中央は梵篋を持つ。左手前は右手に短い柄の幡、左手はやや不鮮明だが宝珠を持つのであろう。全体に風化し、浅い剥離があるものの、よく見ると何れも額に白毫があり、尊顔の厳しく口を結んだ表情がみてとれる。衣は胸前をあけ、両手の袂は蓮華坐まで長く垂れ、裳裾から両足先を見せる像容となっている。

北野石亀仏の石仏構成は弥陀三尊仏の勢至、観音両菩薩立像を除いて、そのまま比賣神社の阿弥陀如来坐像と六地蔵菩薩立像に対比することができる。即ち阿弥陀如来坐像を円形蓮華座と六角形蓮華座を重ねた蓮台上の主尊として、六地蔵の像容、持物では、錫杖と宝珠像、合掌像、拱手像、宝珠と与願印像、梵篋像、幡と宝珠像の何れもが符合する。さらに蓮華座が受花と反花となるこ

* 氷見市　2007　（一）薮田石の神像「氷見の石造物」『氷見市史』10　資料編八　文化遺産　P 413～416
** 氷見市　2007　（二）薮田石の石仏「氷見の石造物」『氷見市史』10　資料編八　文化遺産　P 393～409

とも同様で、加えて受花には蓮弁が刻まれている。北野石龕仏は栄海塚とよばれており、富山県における南北朝時代の典型的な石仏とされている*。

一方、薮田石製の六地蔵菩薩類例には高岡市江道円通庵遺跡と石動山大窪道不動堂跡の六地蔵菩薩がある**。何れも破損、散逸して残存部分は少なくなっているが、像容が分かるものからは両者とも舟形光背で方座上の厚肉彫立像である。方座の下部には円筒状の枘があることも共通する（図4.7）。

円通庵遺跡の一躯は方座下から光背部までの総高は82㎝で、不動堂跡の一躯は光背一部欠損の推定総高が約80㎝と、両地蔵立像とも似かよった法量だが、比賣神社地蔵菩薩立像の総高約78㎝に比べやや大きい。円通庵遺跡には直方体の台座部分があることから、並列する六地蔵菩薩立像とみられる。

また円通庵遺跡では移殿された原位置から離れている薮田石製の阿弥陀如来立像がある。本像も舟形光背で、方座上に立ち、地蔵菩薩立像と同様な枘と推定される。総高93㎝で繊細な彫成になり、温和な尊顔と螺髪や大衣の衣文襞が見事に表わされている。

この阿弥陀如来立像を主尊として、六地蔵菩薩立像が組成されていた可能性がある。円通庵遺跡や不動堂跡の六地蔵菩薩は16世紀ころの造像と推定されている***。比賣神社六地蔵菩薩立像と台座の形は異なるものの、彫成は似るところがある。

2　砺波周辺の薮田石製石造物

薮田石の石造物は石材産出地の氷見市灘浦地域を中心に、富山県西部、東部、さらには能登地域に広がっている。石造物には五輪塔や宝篋印塔、板石塔婆など石塔類と、石仏や神像、狛犬など石像類があり、中世の石像類は立山まで運ばれている****。

砺波周辺の薮田石石造物は決して多くはないが、中世の石塔類と石像類が散見できる。このうち中世石仏については尾田武雄により地蔵半跏像の分布が調査研究さ

* 京田良志 1976「閉ざされた浮彫 石龕仏」『富山の石造美術』P192～195

** 氷見市　2007　（二）薮田石の石仏「氷見の石造物」『氷見市史』10 資料編八　文化遺産　P 393～409

*** 前掲 ** に同じ

**** 富山県「立山博物館」1997 立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（一）「室堂・玉殿窟」

表 4.1　柳瀬比賣神社奥殿基壇埋納石造物　　（　）推定寸法

番号	名称	法量cm			石質	色調	彫成	備考
		総高	幅	奥行				
1	随身坐像・左大臣（阿像）	77.3	47	34.2	薮田石	灰白色	丸彫	
					石灰質シルト岩			
2	随身坐像・右大臣（吽像）	(81.0)	47.7	31.0	薮田石	灰白色	丸彫	
		73.4			石灰質シルト岩			
3	狛犬・阿形	(64.0)	(27.0)	(53.0)	薮田石	灰白色	丸彫	
		39	26	33	石灰質シルト岩			
4	阿弥陀如来坐像	48.5	(34.0)	22.0	薮田石	灰白色	厚肉彫	舟形光背
		41.5	31		石灰質シルト岩			
5	円形蓮華座・受花	16.5	35	35.8	薮田石	灰白色		単弁12葉4段
					石灰質シルト岩			
6	六角形蓮華座・反花	12	(38.5)	(34.5)	薮田石	灰白色		複弁6葉開弁付
			32	18	石灰質シルト岩			
7	地蔵菩薩立像1	(78.0)	(32.0)	23.5	薮田石	灰白色	厚肉彫	舟形光背
		76	30		石灰質シルト岩			宝珠・旗
8	地蔵菩薩立像2	(78.0)	(31.0)	23.5	薮田石	灰白色	厚肉彫	舟形光背
		64.5	28		石灰質シルト岩			合掌か
9	地蔵菩薩立像3	77.2	(31.0)	24.5	薮田石	灰白色	厚肉彫	舟形光背
			27		石灰質シルト岩			宝珠・与願印
10	地蔵菩薩立像4	(77.5)	(31.2)	(23.5)	薮田石	灰白色	厚肉彫	舟形光背
		66	28.5	21.5	石灰質シルト岩			拱手
11	地蔵菩薩立像5	(76.0)	(30.0)	(23.5)	薮田石	灰白色	厚肉彫	舟形光背
		53.0	23.0	22.0	石灰質シルト岩			宝珠・錫杖
12	地蔵菩薩立像6（万遍寺地蔵）	(77.5)	(27.2)	23.8	薮田石	灰白色	厚肉彫	舟形光背
		69.8	26.8		石灰質シルト岩			梵筺

れ、当地域では12躯の報告がある*。地蔵半跏像の姿勢は右手に錫杖を持ち、左足を踏み下げて岩座に座る共通性があり、それらは白山社や神社付近に遺るものが多いことから、その背景には修験や白山信仰と関わるとの指摘がある。地蔵半跏像はその後若干の追加例があり、その中には岩座上の半跏像と異なり蓮華座上の結跏趺坐する庄元雄神神社の地蔵菩薩坐像や柳瀬比賣神社に近接する高岡市西部金屋光證寺地蔵菩薩坐像がある。ここではこれらに加え下中条比賣神社と祖泉神社近くにある地蔵半跏像を紹介する。

祖泉地蔵菩薩坐像　（図4.8）

祖泉地蔵は祖泉神社前方道路脇の小堂に安置されている。地蔵は淡黄色の蛭田石製で、光背の殆どを欠損し、右肩上の錫杖頭もなくなっている。姿勢は右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、岩座上で右足を横に、左足を踏み下げた半跏像である。光背はやや前傾し、円光背か舟形光背かは判然としないが、光背側面からみると後頭部で光背の厚さが半減することから、円光背の可能性がある。彫成は厚肉彫りで、頭部の奥行が大きく、頭頂部や尊顔面を剥離するが、耳は長く、三道をよく表し、胸を大きくあけた大衣の衣文襞は腹部で5条になる。袂は裾を広げ岩座まで垂れ、そこに3条のV字状衣文を表す。踏み下げた左足にも膝を巻く衣文があり、上部ではU字状に垂れ、裳裾からは足先を見せる。

頭頂までの高さ50㎝、岩座幅31㎝、奥行29㎝で、底面は平らで安定性がある。この小堂内には他に岩崎石製（粗粒砂岩）の如来形一石一尊仏も一軀ある。

庄元雄神神社（辨財天社）地蔵菩薩坐像　（図4.9）

庄川左岸の河川敷にある元雄神神社は、かつて雄神神社がここに鎮座した旧地である。元雄神神社は辨財天社の別称があり、社殿に向かって右側奥の岩上に蛭田石製の地蔵菩薩が露座で遺る。

地蔵菩薩は舟形光背で、右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、蓮華座上に結跏趺坐する。像は彫りの深い厚肉彫りで、右手側の光背や錫杖頭部分、尊顔部分を欠損するが、大衣の胸元を大きくあけ、左膝上にのせた右足裏を大きく表す。袂は蓮華座いっぱい横に広げ、衣文襞はU字状になる。

蓮華坐は素弁二段の受花が正面から光背に向け半円形に巡り、その下に反花の単弁八葉の蓮弁が光背まで巡る。背面にはない。反花の蓮弁先端は反転し、厚みのある蓮弁となっている。蓮弁間先端の三角形は間弁を意図したものであろう。

光背はやや前傾し、正面と側面は小突き仕上げ、背面は荒い鑿痕を残している。底面は平らで枘はなく、壇上、あるいは小堂内に安置されていたとみられる。

現存部の高さは44㎝、光背頂部までの推定高さは約47㎝で、蓮華座幅25㎝、奥行21㎝である。

蛭田石製の中世地蔵菩薩坐像は、岩座上で左足を踏み下げた半跏像が多い中で、蓮華座上の坐像は稀少である。本来は雄神神社の社殿内にあった可能性もある。

下中条比賣神社地蔵菩薩坐像　（図4.10）

下中条比賣神社奥殿に、蛭田石製の地蔵菩薩坐像が祀られている。地蔵は灰白色の蛭田石で、肩から上部が欠損したところを、頭部は髪を分けた神子ふうにして、錫杖頭と光背が後補で復元されているが、当初は円頂の頭部であったであろう。光背は円光背で、残存部背面にその形がよく窺え、円光背下部の肩が角張る特徴がある。

姿勢は右手に錫杖を握り、左手に宝珠を持って、岩座上で右足を横に、左足を踏み下げた半跏像である。大衣をまとい、衣文は胸を大きくあけ、右足の衣文は横方向に、左足はV字状に垂下する。右足下斜め方向の線刻は裳裾襞であろう。両側面の袂衣文は3条の線刻で、下端が反転する。

用材は割石とみられるが、側面下部に平滑面があり、自然面であれば転石利用も考えられる。

総高約35㎝、幅25㎝、奥行19㎝で、底面は平らで安定感がある。地蔵菩薩坐像としてはやや小ぶりであり、衣文が平面的な線刻形成が多くなるのは後出的である。

* 尾田武雄 1995「氷見地方周辺の地蔵半跏石仏」『氷見春秋』第32号、尾田武雄 1996「能登・加賀の地蔵半跏像」『氷見春秋』第33号、尾田武雄 1997「中世の越中・能登・加賀三州に展開する地蔵半跏像」『日本の石仏』

光證寺地蔵菩薩坐像　（図 4.11）

高岡市西部金屋の光證寺には薮田石製の地蔵菩薩坐像が二躯ある。何れも近接する毘沙門堂跡付近にあったもので、摩滅が著しく、一躯は頭部と坐像上半身が輪郭で判別できるにすぎない。全形が分かるもう一躯は舟形光背で、左手側の光背と手首、尊顔面を欠損するが、右手に錫杖を持し、岩座上で右足を横に、左足は立て膝ぎみに踏み下げた半跏像である。左足の指まで表し、膝上においた左手には宝珠を持っていたであろう。錫杖頭や衣文も表面が剥離している。現存部の高さは 54 ㎝、岩座幅 34 ㎝、奥行 23 ㎝で、やや前傾する光背は復元頂部までもう 2 ㎝ばかり高かったとみられる。

正権寺地蔵菩薩坐　（図 4.1）

和田川の右岸、増山城跡に近い正権寺の湯に地蔵菩薩坐像が安置されている。地蔵は小堂内にあり全容は分かりにくいが、円光背で右手に錫杖を持ち、左足を踏み下げた半跏像である。総高は約 53㎝ で、灰白色の薮田石になる。腹部で上下に割れ、錫杖頭や円光背の一部を欠損するが、やや面長の尊顔で耳は長く、三道をよく表している。この地蔵は当湯の南側に広がる正権寺遺跡内、五社能社の御神体であったとの伝承がある。当地域では数少ない中世石仏である。

ここにあげた砺波周辺の薮田石製地蔵半跏像のうち、祖泉地蔵と正権寺地蔵の彫成特徴が柳瀬比賣神社石造物との類似点があり、庄元雄神神社地蔵や下中条比賣神社地蔵は後続する彫成とみられる。

図 4.1　正権寺の湯にある地蔵菩薩坐像

3　石造物の造像時期

柳瀬比賣神社の石造物には紀年銘や造像に関わる記録や伝承もなく、造像時期については不明といわざるをえない。しかし砺波地域では 1 ヶ所でこれほどまとまった薮田石の石像類は他になく、おそらく中世の造像と推定される中で、その時期を絞りこむ意味は大きい。ここでは使用されている石材や石造物の類例から、造像時期の手懸かりを探ってみたい。比賣神社に遺る石造物は神像と仏像の石像類だけであり、石塔類は全くみられない。このことが石造物の年代比定を困難にしている要因でもある。これらの石像類は全て薮田石とよばれる石灰質シルト岩で、他の石材が全く使われていないことが特徴である。石像類が比賣神社に遺されるまで、何度か移動のあったことが推定されており、神像と仏像が別々にあったとの見方がある。しかしそれぞれの石像にみられる彫成上の共通する特徴からは神像と仏像に分け難く、薮田石の同一石種であることや、近世以前は神仏習合の時代性から否定的である。

薮田石の石造物消長を見てみると、石像類の在銘遺品は確認できないが、石塔類では射水市本江神明社の阿弥陀如来（キリーク）板石塔婆に文永四年（1267）銘があり*、ほぼ同時期、同様の板石塔婆が射水市中野大日寺にある。これにより薮田石産出地では造塔の要請に応えられる石工集団が存在していたことと、射水市平野部で阿弥陀信仰のひろがりがあったことを窺わせる。さらに薮田石産出地に近い脇方谷内中世墓では 13 世紀後半から 15 世紀末にかかる多くの石塔群が造立され、何れも薮田石であることも石工集団の存続を裏付ける**。

薮田石の石像類は石塔類に比べ造像数が少なく、制作もやや後出するが、14 世紀代には片足踏み下げの地蔵半跏坐像が県西部のみならず、遠隔地にも運ばれた側面がある。この半跏坐像の彫成が衣文のＶ字状抉襞など、比賣神社の地蔵菩薩立像と似ている。

* 氷見市 2007　板石塔婆「氷見の石造物」『氷見市史』10 資料編八　文化遺産 P379 ～ 388

** 氷見市教育委員会 2000『脇方谷内中世墓』

南砺市安居の安居寺石燈籠には慶長四年（1599）銘があり、薮田石はこのころまで、中世全般にわたって石塔類や石像の制作が続いていたことが分かる。

薮田石石造物と同じような分布や消長をみせる石材に岩崎石とよばれる粗粒砂岩がある。中でも石塔類の五輪塔や宝篋印塔は、各地域での最古段階の石塔にみられ、かつ大型である。黒部市石田石塔群や富山市千里常楽寺石塔群では15世紀前半ごろまでは薮田石や岩崎石が使われ、その後は在地の天狗山安山岩に移行し、小型化する傾向がみられる。何れの石材にあっても石塔類では五輪塔水輪や宝篋印塔の塔身、板石塔婆には種子に金剛界大日如来（バン）を刻むものが極めて多い。

薮田石産出地の灘浦は石動山の越中側登り口に位置し、岩崎石産出地の雨晴海岸は二上山の東側で、何れも県西部の海岸ぞいにある。それぞれ中世以来、修験活動が盛んな地域に近接しており、石塔類や石仏類の制作に深く関わったと考えられる。

石造物の類例からの造像時期検討については、先にふれた随身坐像、狛犬、阿弥陀如来坐像と六地蔵菩薩立像を再度整理してみる。

随身坐像は今蔵神社随身坐像と酷似し、何れが先行するか判別しがたいところである。坐像の大小はさておき、彫成では比賣神社随身の側面観では袍の衣文襞をV字状に2条を表わすのに対し、今蔵神社随身にはそれがなく、袖口と袂の襞だけである。これを後出する省略とみるか、本来は不要であるものを比賣神社随身では六地蔵菩薩の衣文襞と同様に表現したにすぎないのかで評価は分かれるが、今蔵神社随身には衣文襞に線刻部分がやや多くなり、像の大きさにもよるのであろうか彫成にやや硬さがみられるのは後出すると思われる。今蔵神社随身坐像は15世紀ごろと推定されているが、その根拠となるところは氷見市村木の片足踏み下げの地蔵半跏坐像の彫成が14世紀ごろ*と推定され、その延長上にあることによる。

狛犬は越前狛犬を参考にすれば、たてがみの2段巻毛から16世紀代と推定されるが、地域性や技術系譜から、15世紀代も視野に入れておきたい。

阿弥陀如来坐像と六地蔵菩薩立像は、石仏構成や六地蔵菩薩の像容が似る北野石龕仏が南北朝時代とされている。石龕石材は中粒砂岩で薮田石ではないが、中粒砂岩は能登穴水町の前波石にもあるほか、灘浦や雨晴海岸付近にも産出することから、薮田石産出地近くで制作された可能性がある。そうであれば石仏構成や六地蔵菩薩の像容類似は、同じ地域で近い時期の見方もできる。

円通庵と不動堂の六地蔵菩薩立像は残存部が少なく、像容、持物の比較はできないが、何れも方座下に枘があり、別石の台座に立てられている。枘の有無が時代性を反映しているかどうかは検討課題である。

円通庵の地蔵菩薩は像高に対して頭部が小さく、細身に見える。そこで像高（身長）を頭長で除した頭身比の数値をみると、円通庵地蔵菩薩は5.74となり、不動堂地蔵菩薩も同じ5.74となる。つまり何れもほぼ6頭身である。ちなみに円通庵弥陀如来の頭身比は5.38である。ところが比賣神社の地蔵菩薩の頭身比は計測できる5軀では3.89～4.23となり、平均4.03、4頭身になる。また北野石龕仏の地蔵菩薩は4.7である。このことは比賣神社の地蔵菩薩の体型（プロポーション）が円通庵や不動堂の地蔵菩薩に比べずんぐりし、体型より尊顔を強調した像容といえる。

一方、衣の襞をみると、比賣神社地蔵菩薩では袂の襞がV字状で3～5条であるのに対し、円通庵地蔵菩薩ではU字状で2条、不動堂地蔵菩薩では1条である。腹前の衣文襞も比賣神社地蔵菩薩が多い。頭身比のみでは時期判別にはなりえないが、ここでは衣文襞が多いことと頭身比が小さいことを、比賣神社地蔵菩薩が円通庵や不動堂の地蔵菩薩に先行する要因とみる。円通庵の地蔵菩薩は16世紀前後とみられているが、比賣神社地蔵菩薩はそれより古く、15世紀を前後する頃と推定する。

以上のように比賣神社の石像類はそれぞれで造像推定時期が異なる。随身は15世紀以前、狛犬は15～16世紀、六地蔵菩薩は15世紀前後などである。阿弥陀如来も六地蔵菩薩と同様である。それぞれが造像時期を異にして制作、招来されたことは考えにくく、あくまで推定の域を出ないが造像時期を15世紀代とみておきたい。

（西井龍儀）

* 氷見市教育委員会 1984『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』

0　10　20　30cm
0　1尺

図 4.2　薮田石随身類例
上：柳瀬比賣神社　下：脇方今藏神社

S=1:8

図 4.3　荻田石産出地と柳瀬比賣神社石造物類例分布図

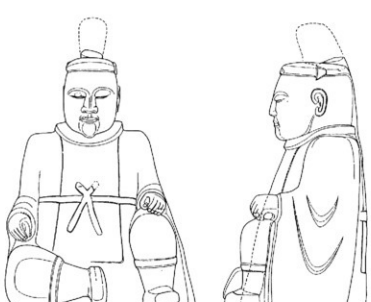


図 4.4　荻田石随身類例　　鳥尾神明社　　S=1:8

1　随身坐像・左大臣（阿像）　正面

2　狛犬（右）、円形蓮華座（左）　側面

3　阿弥陀如来坐像　側面

4　地蔵菩薩立像1　正面

5　地蔵菩薩立像2　正面

6　地蔵菩薩立像2　側面

7　地蔵菩薩立像3　正面

8　地蔵菩薩立像5　正面

図 4.5　柳瀬比賣神社石造物写真

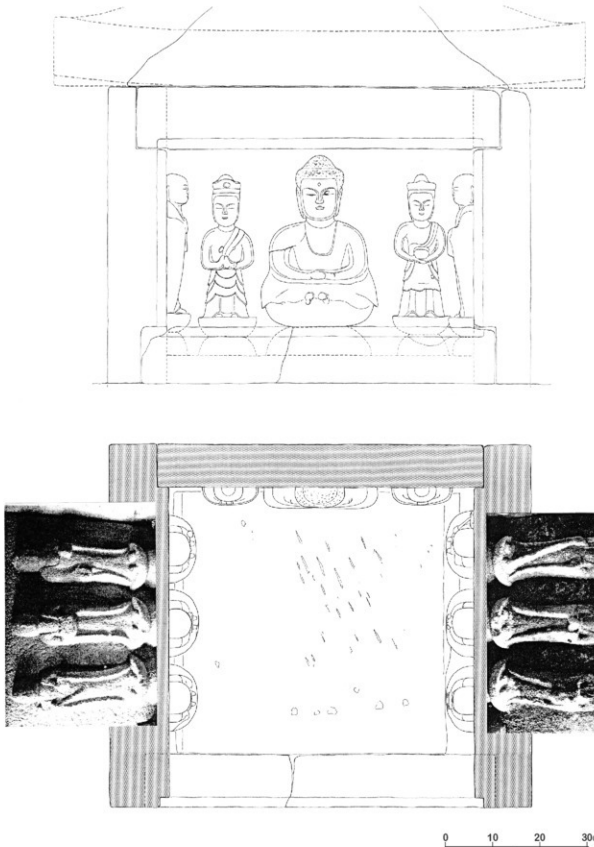
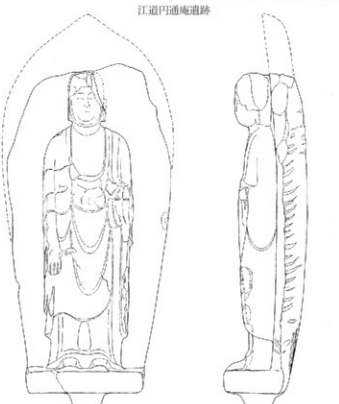


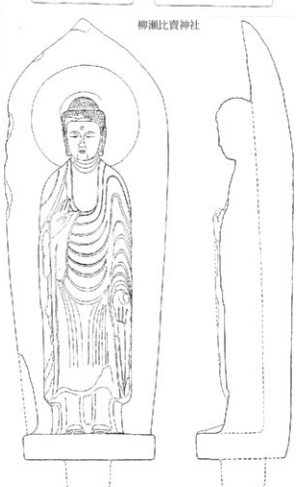
図 4.6　阿弥陀如来と六地蔵菩薩類例　　北野石龕仏　　S=1:8

江道円通庵遺跡

柳瀬比賣神社



石動山不動堂跡



江道円通庵遺跡

図 4.7　薮田石阿弥陀如来・六地蔵菩薩類例　S=1:8

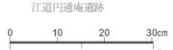


図 4.8　祖泉地蔵菩薩半跏坐像　　S=1:4

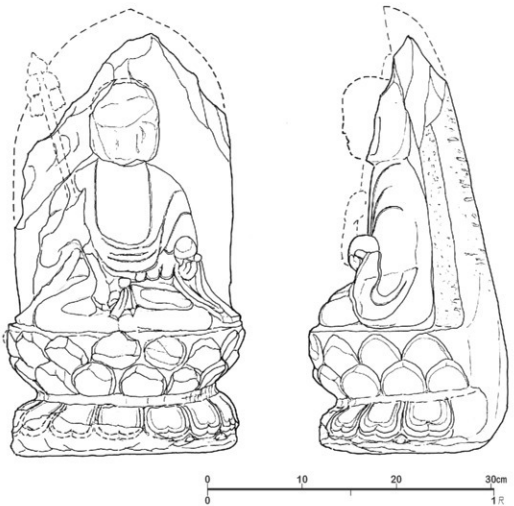


図 4.9　庄元雄神神社　地蔵菩薩坐像　　S=1:4

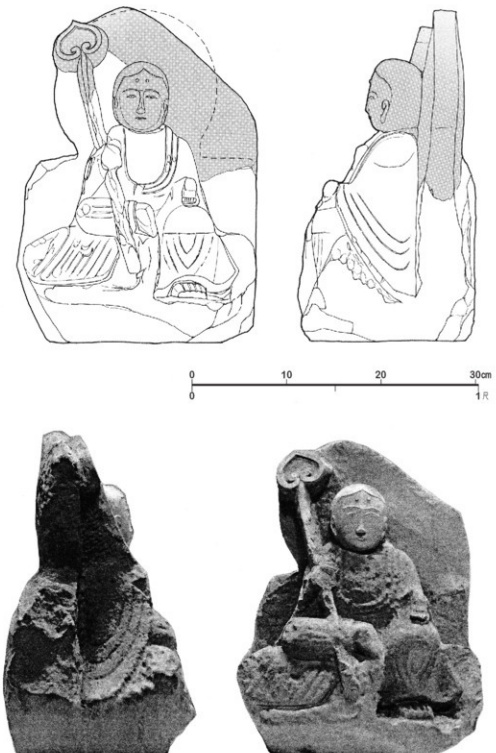


図 4.10　下中条比賣神社　地蔵菩薩半跏坐像　　S=1:4

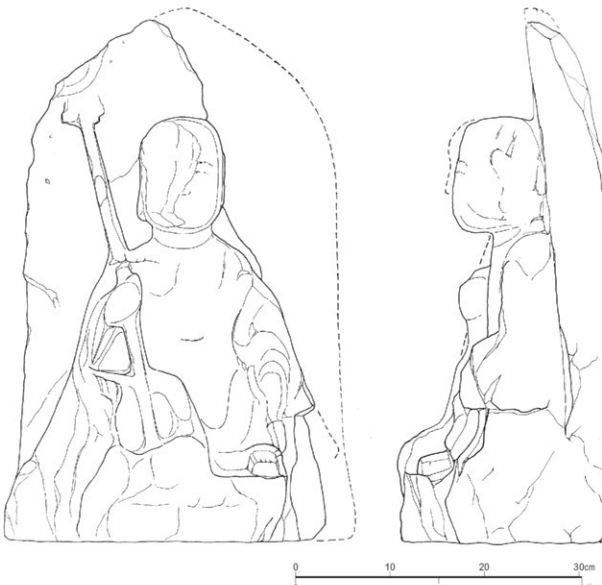


図 4.11　西部金屋 光證寺 地蔵菩薩半跏坐像　　S=1:4

4　氷見から見た今回の発見

はじめに

氷見灘浦海岸に産出する薮田石を石材とする中世の石造物は、近年の研究によって、地元氷見地域だけではなく、朝日町境、生地、立山、射水、砺波、五箇山といった越中一円や、能登の石動山、羽咋等にも分布していることが明らかになっている。

砺波市柳瀬比賣神社において、薮田石製の石造物が発見されたという一報を聞いて、類例が増えたことを素直に喜んだのであるが、その量や内容を詳しく知るに至って、とても貴重な発見であることに気づかされた。

薮田石石造物全体像の中で、比賣神社石造物がどのような意味をもつのか、あるいは、比賣神社石造物からの視点により、薮田石石造物がどのようにとらえられるのか、同じく越中西部における主要石材である岩崎石と比較しながら、現時点でのアプローチを試みてみたい。

越中西部の砂岩石材

越中西部における中世石造物の主要な石材として、薮田石と岩崎石（太田石ともいう。本稿では「岩崎石」で統一する）の二つの砂岩があげられる。

薮田石は、氷見灘浦海岸沿いに分布する薮田シルト層岩盤を利用した石造物の石材名称として使用している。中世石造物には、岩盤中の比較的軟質な部分を利用しており、シルト質の微粒砂岩で、きめ細かく加工性が良く、風化した表面は黄灰色や灰白色になる特徴がある。13世紀後半に石材利用が始まり、16世紀末に衰退すると考えられる。なお、近世初頭には、岩盤中に帯状に含まれる硬質な部分が、建物や墓標などの基礎材として利用されている。石材の露頭場所は数多くあるが、明確な石切場は確認されていない。穿孔具の痕が残る石造物もあることから、海岸部の転石を利用した場合もある。

一方岩崎石は、高岡市雨晴海岸付近に分布する雨晴砂岩層の硬質部分を利用した石造物の石材名称である。中・粗粒で縞状層理がよく表れ、石灰質で軽石を多く含むところもある。古くは、古墳石室材として利用されているが、石造物では13世紀後半に利用が始まった。近世には建築材としての利用が主体となり、近代まで続いている。義経岩背後の丘陵に石切場跡があるが、中世の様相は不明である。

砂岩製石造物研究の現状

薮田石と岩崎石の石造物については、京田良志氏の先駆的な研究*を受けて、昭和58～59年度に、氷見市教育委員会が実施した石動山関連の調査**や、薮田薬師中世墓発掘調査***で基礎的な集成が行われた。さらに平成6～18年度の氷見市史関連調査等****で研究が深まるとともに、薮田石と岩崎石の石材名称が定着した。また、この間に尾田武雄氏による地蔵半跏像の集成*****や、13世紀末から15世紀中頃まで継続した脇方谷内出中世墓の発掘調査******が行われた。しかし、編年や石工集団の実態、製作技術、製作の背景など、解明すべき点が多く残されている。

薮田石と岩崎石の中世石造物に関する研究が困難な理由として、銘文をもつ資料がほとんどないことがあげられる。現在のところ、確実な年号銘をもつ資料は、薮田石では文永4年（1267）銘の射水市本江神明社自然石板石塔婆、貞和3年（1347）銘の氷見市小境髪塚自然石板石塔婆、慶長4年（1599）銘の南砺市安居安居寺石燈籠の3点、岩崎石では天文3年（1534）銘の氷見市長坂光西寺墓地五輪塔陽刻板石塔婆と、天文16年（1547）銘の高岡市江道円通庵遺跡五輪塔陽刻板石塔婆の2点のみである。また、製作者銘を記した資料はなく、石工組織についても手掛かりがない。従って、石造物の編年は、彫成手法や像容の特徴、さらには発掘調査事例における

* 京田良志 1976『富山の石造美術』巧玄出版
** 氷見市教育委員会 1984『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』
*** 氷見市教育委員会 1985『富山県氷見市薮田薬師中世墓発掘調査報告書』
**** 大野究・西井龍儀 2000「越中の様相」『中世北陸の石塔・石仏』北陸中世考古学研究会
西井龍儀 2007「石動山登山道の主要板石塔婆」『氷見市史』10資料編八文化遺産
西井龍儀・宮田進一・大野究 2007「氷見の石造物」『氷見市史』10資料編八文化遺産
***** 尾田武雄 1995「氷見地方周辺の地蔵半跏石仏」『氷見春秋』第32号
****** 氷見市教育委員会　2000『脇方谷内出中世墓』

遺構や遺物との関連から、推定されているところである。

現状で想定する薮田石と岩崎石の石造物の大まかな流れ*について、以下簡潔に記しておく。

薮田石と岩崎石は、共に 13 世紀後半頃から石造物石材としての利用が始まったと考えられる。ただし、この時期の製品は、薮田石は自然石板石塔婆と方錐角柱形板石塔婆、岩崎石は五輪塔と阿弥陀如来坐像や石龕仏とみられる如来形坐像であり、両者の製品は棲み分けされているようである。

14 世紀に入ると、薮田石石造物では引き続き自然石と方錐角柱形の板石塔婆が造られる。一方、岩崎石石造物は如来形一石一尊仏と層塔、さらに宝篋印塔が造られる。これらの棲み分けに対して、五輪塔は岩崎石と薮田石両者の製品が増加する。また、この時期に盛行する片足踏み下げ地蔵は、大部分が薮田石であるが、若干岩崎石のものが認められる。

15 世紀に入ると、宝篋印塔の製作が岩崎石から薮田石に代わる。方錐角柱形板石塔婆は、引き続き薮田石製であるが、この時期出現する五輪塔形と宝篋印塔形**を陽刻又は陰刻した板石塔婆は、薮田石と岩崎石両方で製作されている。また、如来形一石一尊仏には薮田石製のものが加わる。五輪塔は引き続き両者共に製作される。さらに阿弥陀如来坐像、地蔵菩薩立像など、薮田石独自の製品が製作される。

16 世紀もほぼ 15 世紀と同様であるが、五輪塔は一石五輪塔に移行すると考えられ、全体的に両者の石造物は衰退する。なお、神像類や燈籠は、時期を問わず薮田石の製作のみである。

薮田石石造物の中の比賣神社石造物

今回、比賣神社で発見された石造物は、随身坐像一対 2 点、狛犬 1 点、阿弥陀如来坐像 1 点、円形蓮華座 1 点、六角形蓮華座 1 点、地蔵菩薩立像 5 点の 11 点である。これらについて、薮田石石造物の類例との関係を確認しておきたい。

随身坐像は、第 4 章 1 ～ 3 で検討されているように、氷見市脇方地区の今蔵神社の一対 2 点と、島尾地区の島尾神明社の一対 2 点に類例があるのみである。

狛犬は、氷見市島尾神明社にシシ又はサルに似たものが一対 2 点あるほかは、小型の製品として、氷見市蒲田地区の蒲田白山社に 3 点、南砺市安居地区の長谷玉神社に 7 点の狛犬がある。ただし、比賣神社例にみる大型で巻毛を施したものは、初出の資料である。

阿弥陀如来坐像は、立山玉殿窟に頭部を欠く例が 1 点あるのみである。

円形蓮華座は、島尾神明社に石燈籠部品とみられる 1 点があるのみである。ただし、比賣神社例にある側面の半円状の花弁状の浮き彫りはみられない。

六角形蓮華座は、やはり島尾神明社に 1 点、黒部市石田に 1 点、石燈籠とみられる部品があるのみである。

地蔵菩薩立像については、高岡市江道の円通庵遺跡と、県境に近い石動山大窪道不動堂跡に類例がある。円通庵遺跡には、5 軀分の破片があり、このうち 1 軀分が接合でき、ほぼ全体をうかがえる。不動堂跡には 4 軀分の破片があり、このうち 2 軀分の像容がうかがえる。両例とも、本来は六地蔵であったと推定され、比賣神社例は、薮田石製の六地蔵 3 例目となる。

以上のように、比賣神社石造物の第一の特徴として、いずれも薮田石石造物に類例が少ない資料であることが、指摘できる。

次に第二の特徴として、これらがいずれも薮田石石造物の中で、大型の製品であることがあげられよう。薮田石石造物には、射水市本江神明社や中野大日寺の自然石板石塔婆、黒部市石田の六角型石燈籠基礎、南砺市安居寺の石燈籠など、大型のものが遠方に搬出された例があり、比賣神社石造物もこの例に該当する。大型製品の運搬にあたっては、水運の利用が考えられる。

特徴の第三として、薮田石石造物の主要製品である石塔類が、全く含まれていないことである。

主要製品である石塔類を一切含まず、類例の少ない製品で占められる比賣神社石造物の存在は、薮田石石造物が越中一円からの様々な需要に対して、多種多様な製品を製作することで、幅広く応じていたことを示すのではないだろうか。特に、石塔類は他の石材製品である程度

* 大野究　2012「越中西部」『北陸の石造物』石造物研究会

** 廣瀬直樹　2002「氷見の宝篋印塔隅刻板石塔婆」『氷見市立博物館年報』第 20 号

補うことができたが、神像類については、在地石材では蔽田石による製品の独壇場であったと考えられる。

比賣神社石造物は、蔽田石石造物が最も盛行する15世紀の製品である可能性が高く、この時期にこの傾向は特に高まったと考えられる。

蔽田石と岩崎石石造物の背景

蔽田石石造物は、山岳信仰遺跡である石動山の麓に産出地が位置することから、石動山信仰と結びつけられることが一般的である。確かにこのことも重要であるが、石動山山内では蔽田石石造物の比率が少なく、特にその代表的な石造物である自然石板石塔婆は、在地の安山岩や花崗岩を主体的に利用しているという実態がある。

一方、中世石造物が盛行する15世紀の氷見には、多数の真言宗寺院があり、その分布は蔽田石を主体とする石造物の分布と重なる傾向にある*。氷見地域の多様な宗教活動に応じて、蔽田石石造物が広がったと考えられ、ここからも蔽田石の幅広さがうかがえよう。

蔽田石石造物が、各種石塔や片足踏み下げ地蔵を主体としていながら、一方で需要に応じて様々な形態の石造物を製作していたのに対して、岩崎石の製品は、ほぼ五輪塔と五輪塔形や宝篋印塔形の板石塔婆、如来形一石一尊仏に限られる。

岩崎石石材利用の背景には、どのような要因があったのであろうか。そこでひとつの手がかりとなるのが、近代において岩崎石は、建物の土台や放生津潟の普請に使われていたということである**。今のところ明確な資料は欠けるが、中世においても岩崎石は石造物以外に、建築や護岸の基礎として、積極的に利用されていたのではないだろうか。

中世の放生津は、放生津潟とそこに注ぐ神楽川、潟から流れ出る内川、さらに小矢部川と庄川の合流や分岐が繰り返される不安定な低地に、寺社や町場等に結び付いた複数の小規模港湾施設によって構成された港町である***。岩崎石産出地は、これらの港湾施設から水運で2～6kmという距離であり、護岸工事や町場整備等の建築材として、需要が多かったと考えられる。

また、岩崎石石造物にみられる石龕仏は、構築物としての側面をもつ。さらに、氷見市中波地区の天神の森遺跡には、岩崎石製で14世紀頃とみられる石櫛状の構築物の事例がある。

中世における岩崎石の利用を解明するにあたり、石造物だけでなく、建築材としての利用にも、今後目を向けるべきであろう。

一方、近世初頭に硬質部分が基礎材として利用された蔽田石に対しても、こうした利用が中世にさかのぼるのかどうかを、見直していきたい。

（大野　究）

---

* 大野究 2011「蔽田薬師中世墓再考」『氷見市立博物館年報』第29号

** 太田郷土誌発刊委員会　1973『太田―歴史と風土―』

*** 金三津英則・松山充宏　2015「中世放生津の都市構造と変遷」『中世日本海の流通と港町』清文堂

表 4.2　藪田石と岩崎石の石造物と年代

		１３世紀後半		１４世紀		１５世紀		１６世紀	
		藪田石	岩崎石	藪田石	岩崎石	藪田石	岩崎石	藪田石	岩崎石
石塔類	層　塔				○				
	宝篋印塔				○	◎			
	五輪塔		○	○	○	◎	○		
	一石五輪塔							○	○
	自然石板石塔婆	○		○					
	方錐角柱形板石塔婆	○		○		◎		○	
	五輪塔形板石塔婆					○	○	○	○
	宝篋印塔形板石塔婆					○	○		
石仏類	如来形一石一尊仏				○	◎	◎		
	石龕仏		○		○				
	片足踏み下げ地蔵	○		◎		○	○		
	虚空蔵菩薩			○					
	阿弥陀如来坐像		○			●			
	薬師如来坐像							○	
	阿弥陀如来立像							○	
	地蔵菩薩立像					●		○	○
	不動明王坐像							○	
神像類	神官・随身像					●			
	狛　犬					●		○	
燈籠類	石燈籠							○	
	蓮華座					●			

※　◎は類例の多いもの。●は比賣神社石造物が含まれるもの。
　　石龕仏には、如来形坐像と地蔵菩薩立像がある。
　　蓮華座は、仏像台座の可能性もある。

第５章　石造物発見の意義

１　はじめに

今回石仏が発見された柳瀬比賣神社の位置するところは、東に庄川が流れ、西に元庄川の流路であった千保川が流れていた。この間が微高地で旧道中筋往来が南北に走っている。中筋とは千保川と庄川の中の筋という意味が込められている。現庄川が東遷する以前は庄東地区と地続きであった。中世期には京都の公卿徳大寺家領般若野荘域内に、柳瀬比賣神社が鎮座している。当社は古来より延喜式内社の論社とされている*。

この柳瀬比賣神社は、古くから地域住民から尊崇されてきた。その神社本殿修復工事の際に、基壇下から大量の石仏群が出土したことは、歴史的にも貴重である。なぜここに埋められたのか、これら石仏群はどこに鎮座し、祀られ長く維持されてきたのであろうか。また石材が氷見市薮田周辺から採掘される薮田石製であるが**、なぜここにあるのか、多くの課題を投げかけられた。

砺波地方では石仏悉皆調査が進んでいるが、砺波市の総数が 1357 体で、柳瀬地区は 21 体で市内では少ない地区である。しかしながら中世石仏は阿弥陀如来坐像６体や地蔵菩薩が２体の合計８体がある。阿弥陀如来坐像の４体は、真宗大谷派万遊寺境内の観音堂に安置され、ほかは新町公民館前のお堂に１体、下中条の庚申堂の中に１体ある。２体の内１体である地蔵半跏像は下中条比賣神社のご神体として、またもう１体の地蔵立像は、梵篋を両手に持つ姿で、六地蔵の内の１体で万遊寺にある。柳瀬地区は中世石造物である五輪塔などもところどころで散見できる地である。近世の石仏は皆無であるが、中世の石造物が多い地で、石造物から見る限り砺波地方でも稀有な地でもある。そういえば中世期には安定した地であるが、近世以降に庄川が東遷し常にその洪水に悩まされた地域でもある。その治水工事などに優れた技術を持ち、全国的に知られた、土木工事の佐藤工業㈱の創始者佐藤助九郎の出身地でもある***。

２　柳瀬比賣神社と石造物

柳瀬比賣神社の本殿基壇より出土した石仏等は、氷見市産の薮田石製である。この薮田石製の石造物は射水市本江神明社の板石塔婆がある。これは文永４年（1267）銘があり、北陸地方で最も古い。氷見市周辺に中世石造物といわれる五輪塔、宝篋印塔、板石塔婆、石仏などが多く見受けられ、制作が 14 世紀から 15 世紀にかけてのものとされている。今回、氷見や射水から遠く離れた柳瀬地区で、同様な石造物郡が大量に発見され、その性格について検証してみたい。

「正徳二年社号帳」

神社基壇から出土したことにより、神社との関わりが注目され、この砺波では江戸時代中期の堂宮を探る重要な文書「正徳二年九月堂宮社人山伏并百姓持分相守申品書上ケ申帳」（「川合文書」・富山大学附属図書館蔵）略して「正徳二年社号帳」という）がある****。これは加賀藩寺社奉行の命によって各組の十村がそれぞれ管下の堂宮を書上げ、郡奉行へ提出したものである。村ごとに神主・社僧・山伏および百姓が、その奉仕する堂宮を書上げており、加賀藩として最も古い社祠の実態がわかる史料である。砺波郡と射水郡が現存する。

ちなみに砺波郡では正徳２年（1712）の時点で 765 社の堂宮が記されている。当郡では神明あるいは神明林と

* 式内社研究會編『式内社調査報告第一七巻北陸道』「越中編比賣神社」（昭和 60 年刊）・砺波市史編纂委員会編『砺波市史資料編１考古・古代・中世』「古代の神社（式内・国史現在社）と神階奉授について」（平成２年刊）

** 薮田石に関して氷見市史編さん委員会編『氷見市史資料編八文化遺産』「氷見の石造物」（平成 19 年刊）に詳細に記されている。その他に氷見市教育委員会編『富山県氷見市薬師中世墓発掘調査報告書』（昭和 60 年刊）同編『脇方谷内中世墓』（平成 12 年刊）などがある。

*** 柳瀬村史編纂委員会編『柳瀬村史』「資料編石造物」（平成 12 年刊）

**** 砺波市編纂委員会『砺波市史資料編４民俗・社寺』「資料」（平成６年３月）に「正徳二年九月堂宮社人山伏并百姓持分相守申品書上ケ申帳」全文が載せられてある。

称される伊勢系堂宮が247社あり、実に32%を占めている。伊勢信仰は一般に近世に入ってめざましい展開をするとされている。砺波平野の河川跡の開拓と水難防除の神として、また水の神として勧請されたのだろう。さて柳瀬地区の「正徳二年社号帳」にみる堂宮は次の通りである。

一、延喜式比咩大神	柳瀬村
一、十社	同村
一、二階堂	同村
↙此村社ハ砺波郡安川村伊勢持分	
一、観音	同村
一、地蔵	同村
↙此村百姓中支配	

柳瀬地区には延喜式内比咩大神・十社・二階堂以上（社ハ砺波郡安川村伊勢持分）・観音・地蔵以上（百姓支配）の五社が列記されている。神明が無く、古い堂宮名であることがわかる。延喜式内比咩大神・十社・二階堂の三社は明治42年に十社、二階堂の二社は比賣神社に合祀されており、延喜式比咩大神とあるのは、柳瀬一社であり、他に柳瀬地区内の下中条村に比賣神社がある。

合祀後の明治44年（1911）の富山県知事宛に書かれた「神社明細帳」によれば、比賣神社には、祭神は市杵島比賣命、金山彦命、豊受大神、彦波狭武鵜草葺不合命、菊理媛命の五神が祀られている。これは明治44年の合祀の結果である。合祀前の所在地は次のようであった。

祭　神	神社名	所在地
市杵島比賣命	比賣神社	現在地
豊受大神	神明社	一ノ輪
金山彦命	十社之社	一ノ輪
	（文政10年に比賣神社の末社）	
彦波狭武鵜草葺不合命	田稲社	二階堂（松ノ木）
菊理媛命	姫社	新町のお宮

図5.1　太郎兵衛観音（太田萬福寺に安置）

発見石造物と「正徳二年社号帳」

「正徳二年社号帳」には二階堂と十社の堂宮名は、砺波郡では柳瀬にあるのみである。二階堂は柳瀬では東側一帯に通称「二階堂」といわれる小字がある。南は村内中央から、北は東開発の南北にある地域である。現在の柳瀬地区の東町、松ノ木はこの地域に含まれるとある。この地に二階堂の堂宮があったことが知られている。二階堂の祭神が彦波狭武鵜草葺不合命で、神社が田稲社である。柳瀬の古老故田島孝吉氏にお聞きした話に、田稲社つまり二階堂を柳瀬比賣神社に明治42年（1909）に合祀された際に、御神体が重くて輸送に使った馬が難渋したと親から聞いているとされていた。つまり石造物であったのであろうか。

また十社は、『柳瀬村史』によると、「金山毘古命ハ従来相殿十社之社ノ祭神ニテ、創立年月不詳。當社ハ本社比賣神社ト同シ、旧来氏神ト尊崇ス。其他古老ノ口碑モ存セス。文政十年庄川洪水ノ節旧地及社殿破壊ニ及シニ因リ本社ヘ仮ニ合併セシ。以来社殿再興未ダ不成、依テ

図 5.2　カンノンダ（観音田）位置図

明治四拾弐年十月十一日合祀ノ許可ヲ得テ仝年仝月廿三日合祀執行ス。」とある。十社は庄川左岸の川淵にあったのであろう。

地蔵と観音、阿弥陀如来

柳瀬には「正徳二年社号帳」に、仏教的な堂宮に地蔵と観音がある。これは二階堂、十社、延喜式社比咩大神に関わりなく、堂宮が存在していたのではないかと推察している。共に百姓支配で、神社というより小堂であったのであろう。

・観音

柳瀬村の隣村太田村に真言宗萬福寺がある。そこは明治 21 年に観音堂が建設され、40 年に観音様が開扉された。その時の「本尊聖観音菩薩縁起」によると、この観音は柳瀬村北村太良平衛氏宅東北の角にあったとされている。この付近にはカンノンダ（観音田）と称される俗地名が残っている。また『郷土誌』（大正 4 年刊）によると、「元ノ本村観音堂ハ今石地蔵数基アリ。八月二四日地蔵祭トシテ祭祀ヲ行フ」とある。

柳瀬比賣神社から約 400 メートルの前方（東方向）に当たる所に位置する。この聖観音像は 33 年に 1 度の御開帳で、拝見することは難いが、平成 25 年御開帳の際に調査をした。その際に、足首などの腐食が見受けられ粗末な小堂に安置されていたらしく感じられ、室町時代の作と思われた。つまり「正徳二年社号帳」の観音は、現在萬福寺観音堂に安置される聖観音であったと思われる*。

・地蔵

ところで「正徳二年社号帳」の地蔵であるが、昭和 60 年に砺波市婦人ボランティア活動講座の一環で、地

* 太田郷土懇話会編『萬福寺誌』（平成 25 年刊）に「本尊聖観世音菩薩縁起」P1 が記載されている。

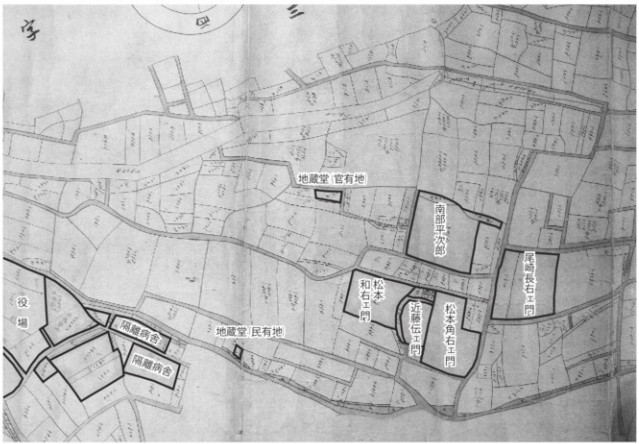


図 5.3　地蔵堂位置図

図 5.4　旧二階堂宮位置図

区内の石仏悉皆調査が行われた。市内各地区では最も少ない14体の調査報告があった。その後『柳瀬村史』編纂時の調査では、堂内調査など精査され21体の報告があった。その内、新町公民館前の小堂は元新町の姫社があった所で、ここに中世の阿弥陀如来石仏が安置されている。この阿弥陀如来石仏は、他にも万遊寺境内にある通称観音堂に3体が安置されている。また堂内中央に薮田石製の梵篋を両手に持つ、地蔵も安置されていた。(現在は万遊寺本堂に安置) このようなスタイルの単独での造立は考えられず、地蔵菩薩は六地蔵の内の1体であり、他5体の所在が気にかけられていた。今回の他の5体の発見で、6体揃い六地蔵となられたのである。

3　二階堂の地蔵堂と旧二階堂宮

六地蔵は観音と同じく、「正徳二年社号帳」の二階堂と十社、延喜式内社比咩大神と関わりなく、小堂に安置されていたと推察するのが自然であろう。柳瀬尋常高等小学校編『郷土誌』(大正4年) によると、「地蔵堂　柳瀬村字二階堂千四百弐番地安置。観音堂に合併 (明治42年8月)。地蔵堂　柳瀬村字二階堂一、五二六番地安置。観音堂ニ合併 (同上)」とあり、「土地台帳」によると字二階堂千四百弐番地は「堂宇敷　弐拾参歩　官有地」とあり、字二階堂一、五二六番地は「田　七歩　私有地」となっている。2カ所の地蔵堂に安置されていた石仏が、万遊寺境内の鐘楼堂南にあるカンノンダより、移転された観音堂に移されたのである。

明治42年には、二階堂にあった田稲社、境内末社の十社大明神 (元一ノ輪) が比賣神社に合祀され、11月には宮大工藤井助之烝により拝殿等の設計図が出来上がったときである*。現在、万遊寺の観音堂には5体の石仏があり、3体は中世の阿弥陀如来であり、2体の地蔵は明治期に造像されたものと思われる。

3体の阿弥陀如来石仏は「字二階堂一、五二六番」地 (私有地) と「カンノンダ」の観音堂にあったものが安置されたものである。

現在本堂にある薮田石製の梵篋を持つ地蔵は、元この観音堂に安置されたいたものである。それらを勘案すると、比賣神社本殿から発見された地蔵は、六地蔵の状態で、二階堂の官有地の地蔵堂にあったものと推察される。ところで、「正徳二年社号帳」に対し、その控えが柳瀬村の堂宮に奉仕される砺波郡安川村黒田伊勢に残されている「正徳二年五月四日　産子方村々氏神帳　砺波郡安川村黒田伊勢」**がある。それには、延喜式比咩大神、十社、二階堂とともに、観音堂、地蔵堂が持宮として記載されている。観音堂や地蔵堂が社司として意識されていたのであろう。『郷土誌』(大正4年) に記載される「地蔵堂　柳瀬村字二階堂千四百弐番地安置。観音堂に合併 (明治42年8月)」は、地所が明治44年まで内務省であり、その後民間に払い下げられている。ここに六地蔵の安置されるお堂があり、柳瀬比賣神社の宮司黒田氏が奉仕されていたのであろう。六地蔵の内、最も保存状態の良い、梵篋を両手で持つ地蔵を観音堂に残し、破損の激しい石仏を比賣神社本殿に、丁寧に頭を西向きにして奉安されたのであろう。観音堂の鍵は比賣神社氏子中が管理されていることは、ここが六地蔵との関わりを示しているのであろう。

田稲社 (旧二階堂) の元所在地は、現在柳瀬地区松ノ木集落の澤村勝平氏宅と長谷川勝次宅の境にあった。「土地台帳」によると、ここは「字二階堂千二百九拾四番ノ一　社地二畝三歩　官有地」と「字二階堂千二百九拾四番ノ弐　社地一畝四歩　村社比賣神社」とある。ここに田稲社 (旧二階堂社) があった。明治42年に字二階堂に

図5.5　万遊寺境内の観音堂

* 太田郷土懇話会編『藤井助之烝文書目録』(平成9年刊)

** 砺波図書館協会編『中越郷土叢書第十六号』(昭和40年刊)

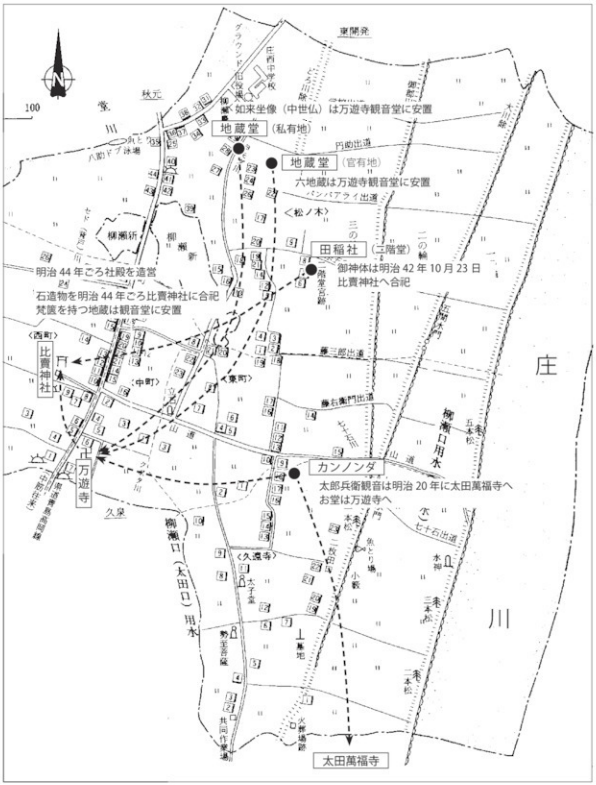


図 5.6　石造物の移動図

※この図は『砺波市史資料編5集落』（砺波市史編纂委員会 1996）P690の「柳瀬 昭和30年ころ」を基に尾田が改変したものである。

表 5.1　柳瀬比賣神社石造物関係年表

和　暦	西暦	事　項	参考文献
明治 20 年	1887	太郎兵衛観音を太田萬福寺へ移す	①②
明治 21 年 4 月上旬	1888	太田萬福寺観音堂建設設計に入る	③
明治 30 年	1897	一ノ輪に鎮座していた神明社が大洪水で神域流失	①
明治 42 年 5 月 5 日	1909	一ノ輪に鎮座していた神明社が比賣神社に合祀	④
明治 42 年 10 月 11 日	1909	十社之社、文政 10 年に庄川洪水の節旧社地破壊し、比賣神社に仮合祀されていたが、正式に合祀	④
明治 42 年 10 月 23 日	1909	二階堂 1294 番地の田稲社（旧二階堂社）比賣神社に合祀	④
明治 42 年 12 月 8 日	1909	二階堂 1402 番地（官有地）の地蔵菩薩を観音堂に安置（石造六地蔵）	①
同	1909	二階堂 1526 番地（私有地）の中世阿弥陀石仏を観音堂に安置	①
明治 42 年 11 月上旬	1909	柳瀬比賣神社御拝殿等建築設計に入る	③
明治 44 年 1 月	1911	柳瀬比賣神社建設工事に入る	③
明治 44 年 2 月 8 日	1911	二階堂 1402 番地の堂宇敷の官有地（内務省）が民間に所有権移転	⑤
明治 44 年 12 月 22 日	1911	柳瀬新村明堂 32 番地姫社を、比賣神社に合祀	④
明治 44 年（10 月）	1911	柳瀬比賣神社五社合祀により社殿造営される（この頃に石造狛犬、随身、六地蔵と阿弥陀如来が合祀か）	⑥

※　①柳瀬尋常高等小学校編『郷土誌』（大正 4 年）
②太田郷土塾話会編『萬福寺誌』（平成 25 年刊）
③砺波郷土資料館編『藤井助之亟文書目録』（平成 9 年刊）
④富山県立図書館蔵「神社明細帳」
⑤砺波郷土資料館蔵「土地台帳」
⑥砺波市史編纂委員会『砺波市史 5 集落』（平成 8 年刊）

あった田稲社（旧二階堂）が柳瀬比賣神社に合祀されたのである。

・阿弥陀如来坐像

近世以降であるが小矢部市周辺等では野にある六地蔵の中央に阿弥陀如来坐像を配置する場合がある。

県内では、黒部市北野に栄海塚と呼ばれる石龕がある。そこには正面に弥陀三尊を刻み、左右両脇に 3 体ずつの地蔵菩薩を刻んでいる。左右の地蔵菩薩は六地蔵でありその蓮台や彫法は比賣神社の六地蔵と酷似している。同時代のものであることがわかる。柳瀬比賣神社から出土された阿弥陀如来坐像は、六地蔵の真ん中に鎮座されていたものであろう。

近県では石川県白山市白峰に浮彫りの六地蔵を彫り、その上部に阿弥陀如来坐像を彫りこむスタイルがある（白山市指定文化財）。正面右側には「道橋」「永禄五年」

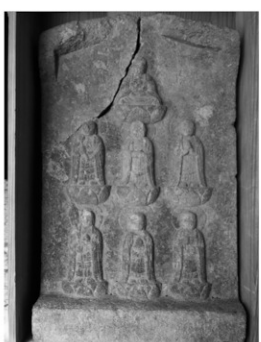


図 5.7　中央に阿弥陀如来が安置（石川県白山市白峰）

表 5.2　般若野荘から移転・移動した寺院

No.	山号・寺院名	宗　派	所 在 地	旧　地	旧宗派（伝承等）	備　考
1	金剛山恩光寺	曹洞宗	南砺市福野	砺波市増山	曹洞宗	増山から金剛寺に移り福野町へ移転
2	金泥山大乗寺	浄土真宗本願寺派	高岡市東保新	砺波市東開発	浄土真宗	
3	永森山常念寺	浄土真宗本願寺派	高岡市大手町	砺波市東保	浄土真宗	
4	永安寺（海雲寺）	曹洞宗	高岡市戸出	砺波市下中条	曹洞宗	
5	増谷山妙蓮寺	浄土真宗本願寺派	射水市立野（新湊）	砺波市増山	不明	
6	般若山光照寺	浄土真宗本願寺派	射水市市井	砺波市頼成	天台宗	本願寺7世存如に帰依して開基したという。
7	白谷山尊光寺	真宗大谷派	富山市山田	砺波市頼成	真言宗	
8	智光山西養寺	浄土宗	富山市南田町	砺波市増山	不明	
9	森田山長念寺	浄土真宗本願寺派	富山市長江	砺波市増山	不明	
10	春日山光厳寺	曹洞宗	富山市五番町	砺波市増山	曹洞宗	
11	龍宝山如来寺	浄土宗	金沢市小立野	砺波市増山	浄土宗	
12	興隆山集福寺	高野山真言宗	石川県能美市辰口町	砺波市石坂	真言宗	
13	雪峯山勝久寺	浄土真宗本願寺派	岐阜県高山市	砺波市増山	浄土真宗	
14	極楽寺	不明	不明	砺波市増山	浄土宗	
15	法光山光福寺	浄土真宗本願寺派	砺波市秋元	砺波市柳瀬	天台宗	元柳瀬比賣神社の後ろにあったという。
16	華蔵閣巌照寺	浄土真宗本願寺派	砺波市旧福岡（庄川河床）	砺波市福岡	浄土真宗	本願寺五世綽如の開基という。
18	中村山安詳寺	浄土真宗本願寺派	高岡市市野瀬	砺波市中村（庄川河床）	浄土真宗	
18	三谷山西方寺	浄土真宗本願寺派	射水市三戸田	砺波市三谷	真言宗	真言宗実相院の僧が開基という。
19	三谷山西方寺	浄土真宗東本願寺派	砺波市油田	砺波市三谷	真言宗	
20	勝福寺（北条山光證寺）	真宗大谷派	高岡市西部金屋	高岡市落合	浄土真宗	東西分派で分寺。親鸞の弟子性信坊の開基という。
21	勝福寺（高龍山報恩寺）	浄土真宗本願寺派	高岡市戸出	高岡市落合	浄土真宗	

※『砺波市史資料編4　民俗・社寺』（平成6年3月刊）等を参考にした。

左側には「四月十五日」が刻まれている。これは白山の越前禅定道に奉納されていた石仏で、長い間鶴野家の墓地に置かれていたが、現在は仏間で安置される。これは直接白峰とは関係のない越前側の白山信仰の所産とみなされ、信仰のために登山する越前の人によって納められたものである。しかし、明治時代の廃仏毀釈によって、本来の越前ではなく加賀方面へ下ろされて守られてきたものである。元は越前禅 定道の剃刀岩周辺にあったとされている*。

阿弥陀如来坐像を単独に御神体とする例は近隣では多分にあるので、3社のうちの場合も想定できるが、現段階では特定できない。

・狛犬、随身坐像

出土石造物の中に、随身坐像2体、狛犬1体がある。これらの内、何体かは延喜式内社比咩大神、二階堂、十社に関わりがありそうである。台座は阿弥陀如来が安置されたものと推理される。随身坐像と狛犬のどちらか、あるいは両者とも前述のとおり明治42年（1909）合祀の際に、御神体が重くて輸送に使った馬が難渋したと伝えられているので**、二階堂の田稲社（正徳二年社号帳では

* 「北陸石仏の会会報第48号」池田紀子「白峰の白山下山仏」・石仏研究家滝本やすし氏より教示を得た。

** 元田稲社（旧二階堂社）の社地に住む、沢村勝平氏（昭和12年生れ）の祖父の談として伝わる。

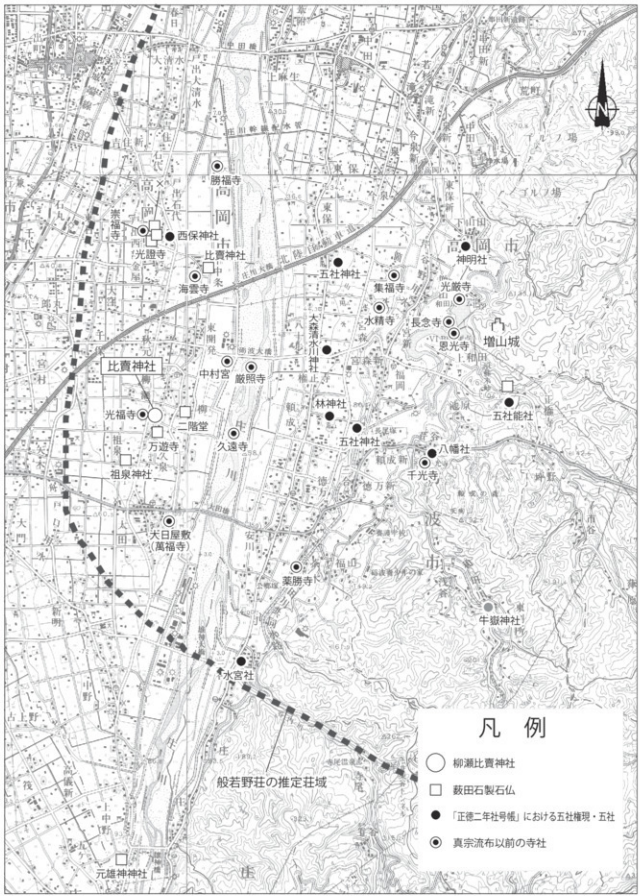


図 5.8　旧般若野荘における中世の宗教環境図　　S=1:50,000

二階堂）に安置されていたものと思われる。

4　石仏が造像された周辺

柳瀬地区の近くに大窪という集落があり、真宗大谷派常福寺がある。そこには国指定重要文化財木造阿弥陀如来立像が安置されている。寺伝によると增山城主神保安芸守の祈願所であり、久遠寺の本尊として尊崇を集め、增山城落城の際に般若郷開発の中村宮に逃れ、御神体として崇められてきたとされている。その久遠寺であるが、二階堂のある集落のとなりに地名の小字として残っている。久遠寺については「久遠寺集落のこと」（『柳瀬村史』）*に詳細に紹介されている。

滋賀県にある玉桂寺に伝わる阿弥陀如来立像の内部から「越中国百万遍勤修人名」など、大量の納入文書が発見され、建暦２年（1212）１月25日に弟子の源智が中心になり造立した。この造仏には後鳥羽上皇をはじめとする数万の念仏信者が寄進し、各人の名前が記された交名簿が像内に収められていた。これにより越中において浄土宗の信者が多くいたことがわかる。鎌倉時代から一貫して、この地は京都の公卿徳大寺家の荘園般若野荘域であり、徳大寺実能の孫、円実の子である正信房（聖信房）湛空は、はじめ比叡山で学び、六六世天台座主実全の弟子として、顕密二教を習得する。その後法然に帰依をして専修念仏につとめる。そして法然の門弟である信空から、それぞれ円頓戒を相承されている。建永２年（1207）法然が配流の折に隋従したとされ、建暦２年（1212）法然の中陰供養にあたっては、三七日忌の施主をつとめている。その後、嵯峨野の二尊院に住して念仏を勤め、そのためその門流を嵯峨門徒と称している。嘉禄の法難によって転々とした法然の遺骨を、天福元年（1233）西山粟生野の幸阿弥陀仏の庵から迎え、二尊院境内に宝塔をつくって安置し、その後も供養をつづけたとされている。法然の三十三回忌に合わせ、それまでの法然の伝記をまとめた『本朝祖師伝記絵詞』を制作している**。また田淵句美子氏によると湛空は「宗教史上、法然教団の中で大きな役割を果たした人物である」とされている***。それから徳大寺公能の孫公継は「越中国百万遍勤修人名」に記されている****。

般若野荘は徳大寺家にとって重要な地であり、多分に湛空や公継等の影響を受けた人々がいたと思われ、常福寺の阿弥陀如来立像や柳瀬比賣神社出土の石仏も、この徳大寺家との関わりを注意する必要があろうと思われる。

5　周辺の薮田石の石造物

庄川扇状地の砺波市内の石造物の分布を眺めてみると、扇央部に位置する砺波駅周辺の出町地区等には少なく、庄川の両岸地域の右岸の庄川町雄神地区や般若、東般若、その下流域の高岡市中田、左岸は太田、柳瀬、南般若、下流域の高岡市北般若地区に広く分布している*****。ここは中世、徳大寺家領般若野荘が広く展開していたところである。大治３年（1128）頃から天文14年（1545）まで約４世紀にわたって紆余曲折があったが、領主は変わらなかった。現在庄川で分断されているが、当時は地続きであった。ここに薮田石製の石造物がある。

薮田石は、氷見灘浦海岸に産出し、地質的には新第３紀鮮新世後期（300～200万年前）の薮田シルト岩層にあ

*　柳瀬村史編纂委員会編『柳瀬村史』「村々の起こり」（平成12年12月刊）
**　藤井正雄他編『法然辞典』（平成９年８月刊）

***　田淵句美子「湛空とその周辺」（『中世初期歌人の研究』（平成13年２月）
****　杉崎貴英「砺波市常福寺阿弥陀如来立像の造立背景に関する一試論―安阿弥様・浄土宗・越中国百万遍勤修人名・徳大寺家領般若野荘―」『日本宗教文化史研究』（平成19年刊）
*****　砺波市史編纂委員会編『砺波市史資料編１考古・古代・中世』「中世石造遺物」P893

表 5.3　旧般若野荘における薮田石地蔵一覧

No.	尊　名	所　在　地
1	地蔵半跏像	砺波市祖泉　祖泉神社前小堂
2	地蔵立像	砺波市柳瀬　万遊寺本堂
3	地蔵半跏像	砺波市下中条　比賣神社
4	地蔵半跏像	高岡市西部金屋　光證寺
5	地蔵半跏像	高岡市西部金屋　光證寺
6	地蔵半跏像	砺波市正権寺　正権寺の湯
7	地蔵坐像	砺波市庄川町庄　元雄神神社奥殿脇（荘域外）

たる。薮田石製の中世石造物は、氷見市を中心に射水、砺波、五箇山、立山、富山平野南部、黒部石田浜等に広く分布している。石造物の種類も宝篋印塔、五輪塔、板石塔婆、石仏、随身、狛犬など多岐にわたり確認されている。薮田石製石造物の制作時期は、銘文のあるものが少なく、細かくは特定できないが、北陸でも最古となるのが射水市大門本江神明社の文永４年（1276）銘板石塔婆である。近辺では南砺市安居の安居寺には石灯籠の慶長４年（1599）がある*。

砺波の旧般若野荘域内にも地蔵半跏像がある。表のとおりである。

6　旧般若野荘の中世石造物

砺波市内の中世石造物悉皆調査の結果は、『砺波市史資料編１　考古　古代・中世』（平成２年３月刊）を報告した。市内では柳瀬比賣神社のある旧般若野荘域内に広く分布していることがわかる。宝篋印塔は９基中８基がこの荘域内にあり、寺院を中心に笠部の残欠がみられる。薬勝寺の南墓地中央にある親王塚にある宝篋印塔は南北朝期の造立とされている。五輪塔の残欠もこの荘域内に寺院や墓地などに多く見受けられ、水輪に梵字「バン（金剛界大日）」を刻むものが多い。板石塔婆は13基があり、多くはその中央部に梵字「バン（金剛界大日）」を刻む。石仏は薮田石製の地蔵立像や半跏像がやはり荘域内にあり、如来形石仏も同様である。

この荘域内における中世石造物の展開について興味深いのが、五輪塔や板石塔婆に刻まれた梵字は「バン（金剛界大日）」であり、いわゆる真言系の人々による造立であろうと思われる。ところが如来形石仏は阿弥陀如来であり、浄土系信者の造像と思われ、同荘域内に真言系と浄土系の信者が重層的に居たことが推察される。このことについては故京田良志が富山市の石仏・石塔悉皆調査を基にした報告「室町時代の石塔」（『砺波散村地域研究所研究紀要第６号』平成元年３月刊）がある。それによると、板石塔婆は、オベリスク状に「バン」一字、あるいは五輪図形に「バン」一字のものがほとんどで、石仏は川石に仏像を一体刻んだもので、ほとんど全部が阿弥陀如来だとされている。「バン」は真言念仏系、弥陀は浄土系のようであり、分布図によると、隣り合わせにありながらぴったりとは重ならない。旧般若野荘域でも共通性を感じるところである。

ここにこの荘域内における特徴的、石造物について言及しておきたい。

・如来形石仏

如来形の石仏はこの旧荘内には16体の阿弥陀如来坐像と思われるものがある。特に柳瀬地内周辺に見受けられるので報告しておきたい。万遊寺観音堂には３体あり、これは村上地内にあった観音堂と、二階堂に元あった地蔵堂（民有地）にあったものが、請来したものである。

また柳瀬新村にあった姫神社跡にある地蔵堂に安置されるもの、下中条の庚申堂に鎮座するのも同様な如来形石仏である。東開発の春日神社内にも同様に安置されている。隣村久泉、祖泉両村の神社にもこの石仏が安置されている。これら如来形石仏は、柳瀬比賣神社から発見された薮田石製の石造物と同時期の造像とされている。石材も氷見市周辺の高岡市太田地内などから採掘される砂岩質の岩崎石（太田石）である。

頭部に肉髻があり、薄い浮彫の彫法で腹前に両手で印を結んでいる。釈迦か阿弥陀か不明であるが、この時期の浄土思想が流布しており、弥陀印を結ぶ阿弥陀如来坐像とイメージされる。また下部は安定性の悪い三角形状になっている場合が多い。これらは土饅頭の墓の中央部に刺して置かれたものと推察される。

このような岩崎石製の如来形石仏は、氷見地方を中心に射水市・高岡市などにも広く分布している。如来形石仏について、西井龍儀氏が「氷見の石造物」（『氷見市史10　資料編八文化遺産』平成19年発刊）で石造美術研究家故京田良志著『富山の石造美術』のコメントを引用されておられ、多くの示唆に富んでいるので再掲する「県内では、扇状地の扇央部に多く見られ、次いで同扇頂部、海岸線と大きな河川沿いに多いようであり、まず扇端部から開拓されたと考えられる扇状地にみられる石の文化の

* 氷見市立博物館編『特別展　薮田石のかたち―石造物が語る中世―』（2008年刊）

8　万遊寺観音堂

9　万遊寺観音堂

10　万遊寺観音堂

11　新町旧姫神社跡地蔵堂

12　東開発春日神社

13　下中条庚申堂

図 5.9　旧般若野荘の如来形石仏

表 5.4　旧般若野荘の如来形石仏

No.	所　在　地	高さ	幅	石材	備考
1	安川・薬勝寺墓地	34	25	砂岩	
2	八十歩・公民館横	36	23	砂岩	現庄川の河床より請来
3	東保・浄光寺前地蔵堂	52	36	砂岩	近くの墓地より出土した。
4	東保・石坂墓地	37	27	砂岩	元浄光寺墓地にあった。
5	太田・萬福寺山門	44	29	砂岩	将棋の駒形で蓮華座がある。
6	祖泉・祖泉神社前地蔵堂	53	30	砂岩	
7	久泉・久泉神社	33	29	砂岩	神社内にある。
8	柳瀬・万遊寺観音堂	44	28	砂岩	村上にあった観音堂、二階堂にあった地蔵堂（民有地）内ものを移転する。
9	柳瀬・万遊寺観音堂	37	25	砂岩	
10	柳瀬・万遊寺観音堂	32	30	砂岩	
11	柳瀬新町・地蔵堂	57	30	砂岩	近く民家より出土
12	東開発・春日神社	49	32	砂岩	神社内にある
13	柳瀬下中条庚申堂	47	30	砂岩	
14	秋元・観音堂	39	26	砂岩	旧道中筋往来にあり、元大三昧があったところといわれる。
15	秋元・観音堂	39	25	砂岩	
16	千保・地蔵堂	39	22	砂岩	元栴檀野にあったといわれる
17	庄川町三谷・水宮神社	33	32	砂岩	

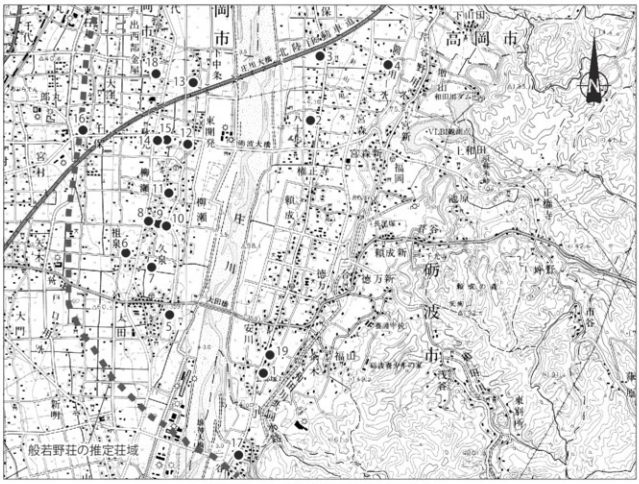


図 5.10　旧般若野荘内の如来形石仏の分布　　S=1:50,000

特色を示している。この発願造立者は地域の小領主らであった」とされている。

旧般若野荘にみられる如来形石仏は、浄土系を信仰した地域の小領主等の墓として造像されたのであろう。それが地域の中心的な神社や寺院に安置され先祖神として大事に維持され、信仰が繋がっているのだと推察する。そしてこれら如来形石仏を造像された人々が、柳瀬比賣神社の石造物群も維持され信仰されてきたのだろう。

・板石塔婆
　法泉寺塔

板石塔婆は市内には14基あり、オベリスク形が3基、扁平な方錐形に種子もしくは五輪塔を刻したもの7基、自然石に種子を刻したもの2基、割石に種子を刻したもの2基である。とくに貴重なのは市内秋元の法泉寺塔である。これは昭和35年11月に、柳瀬比賣神社にほど近い秋元地内を流れる堂川改修工事の際に発見されたものである。

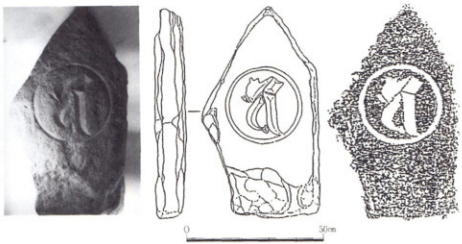


図 5.11　法泉寺塔・板碑実測図（S=1:14）　　作図・拓影　安念幹倫

壁川には安山岩の割石を用い、塔身面いっぱいに月輪を刻み、その中に雄渾に「バン」を薬研彫りにしている。月輪内はふくらみがあり、鎌倉末期から南北朝期の造像とされる。近くに俗に「ジトホ（地頭坊）の御坊（速恩寺）」があり、また周辺には廃寺となった真言宗崇福寺があった。高野山宝亀院に蔵する『疎論義』の奥書に（『富山県史資料編Ⅱ中世』昭和50年10月刊）

越中国於般若野庄金屋談義所書了、「有義（異筆）」
正長元年十一月　日

とあり、室町時代初期の正長元年（1428）、般若野庄西保金屋に談義所があったという、また「折橋文書」（富山県史資料編Ⅱ中世』昭和50年10月刊）には鐘銘の記録が載せられている。

奉鋳鐘一口
越中国都波郡般若野庄地頭方東保郷毘沙門堂常住
永正三年三月廿八日
願主常福寺秋賢
大工放生津源才（氏）誠吉

般若野庄地頭方に毘沙門堂があったことがわかる。この「バン」を刻んだ板石塔婆周辺には、宗教的なイメージが広がっている。このことについての検証は佐伯安一氏「庄西大井川地区周辺の歴史」（『県営かんがい排水事業庄西大井川地区　事業誌』富山県砺波農地林務事業所編・平成２年１月刊）や『砺波市史資料編１　考古　古代・中世』（平成２年３月刊）、「富山県高岡西部金屋の地蔵半跏像」（『北陸石仏の会研究紀要第６号』平成15年９月刊）に詳しい。

西行塚碑

砺波市庄川町三谷に砺波市指定文化財「西住塚」がある。江戸中期の農学者で、和歌・漢詩・茶道・連歌・禅・俳諧などに通じ、安永八年（1779）砺波・射水両郡の民情を調査する除聞役などの務めた宮永正運の随筆に『越の下草』がある。「西行庵旧跡　般若郷三谷村にあり」とし西行伝説を述べている。同書には三谷の下流高岡市大清水永願寺にも、西住碑がありこれが元来三谷にあったものとされている。銘文は次の通りである。

□□□□百余□□
（月輪中キリーク）　十方三世仏
八方諸聖教　　西住
皆是阿弥陀仏
亡霊菩提

この石碑については、石造美術研究家故藤原（京田）良志「西行塚とその石碑について」『大境』第３号（昭和42年発刊）が、この石碑を克明に調査され報告されている。その碑面に彫られた偈文が時衆に関わるもあること、また裏面には大日の梵字バンが彫られ、削られていることなど示唆に富んだ素晴らしい論文である。今尚新鮮な光を発しているが、ここにも真言系と浄土系の信仰のありようが興味深い。またこの石碑に関しては他に尾田武雄「北陸の西行と西住伝承」（『西行学第三号』平成24年８月刊）、尾田武雄「板碑偈文「阿字十方」と西住塚」（『北陸石仏の会研究紀要第９号』平成20年10月刊）、久保尚文氏「西行伝承地般若野荘の転変」（『西行学第五号』平成26年12月刊）がある。

図 5.12　庄川町三谷にあった板石塔婆

7　信仰と石造物

薮田石で制作された中世石造物は，宝篋印塔、五輪塔、板石塔婆、随身、狛犬など信仰の対象物が大半である。石仏に関しては阿弥陀如来、薬師如来、菩薩像、それに地蔵などがあるが、地蔵半跏像が富山県を中心に石川県や岐阜県まで広がりがある。まだ拝見できない神像なども、多く神社奥殿に鎮座しておられるだろうと想像することは難くはない。

薮田石の採掘される場所は氷見市灘浦海岸であり、そこには能登と越中との境にまたがる石動山がある。山頂は三角形をなしてそびえ立ち、氷見市全域から眺めることができ，古くから信仰の山として知られ現在、伊須流岐比古神社が鎮座する。延喜式内社で能登国二宮であった。縁起書によると，太古，天空から星がこの山に落下して山が動いたので石動山と名付けられたという。巨石は勧字石と呼ばれ，今も玉垣で囲まれたところに安置され尊ばれている。

同神社を中核にして神仏習合の山林仏教道場が開かれ、それが天平寺に発展して勅願所となり，中世の盛時には 360 坊，衆徒 3000 人，神域は 50 町（約 5 km）四方に及んだという。この石動山は砺波地方にも大きい影響力をもっていて、宗教センターの体をなしていたのである。伊須流岐比古神社は中世以降五社権現とも呼ばれていた。

「正徳二年社号帳」によると、射水郡には五社大明神、五社大権現等のいわゆる五社権現は 10 社、砺波郡には 18 社ある。砺波市芹谷にある高野山真言宗芹谷千光寺の開基縁起は、石動山古縁起と似た伝承を持ち、その影響がうかがえられる。砺波郡でも特に旧般若野荘域に多く、10 社もある。

柳瀬比賣神社本殿から発見された石仏や狛犬等の信仰の対象物であるこれらは、石動山信仰を運んだ衆徒との関わりがあると思われる。そして石動山近くの氷見灘浦海岸付近から採掘された薮田石製の中世石造物が、大量に発見されたことは、石動山や氷見との交流があったことを示しており、中世の信仰や交易を考える物証として、きわめて重要である。

表 5.5 「正徳二年社号帳」による五社と五社権現の一覧表

No.	正徳二年社号帳の名	所在地	現在の神社名
1	五社	砺波市庄川町三谷	水宮社
2	五社権現	砺波市正権寺	五社能社
3	五社権現	砺波市東別所	牛嶽神社
4	五社権現	砺波市芹谷	八幡社
5	五社権現	砺波市徳万	五社神社
6	五社権現	砺波市頼成	林神社
7	五社権現	砺波市宮森	大森清水神社
8	五社権現	砺波市東保	五社神社
9	五社権現	高岡市下山田	神明社
10	五社	高岡市西部金屋	西保神社

終わりに

富山県西部の砺波地方は真宗王国である。南砺市には真宗大谷派の城端別院善徳寺、井波別院瑞泉寺があり、真宗風土の強い地帯である。真宗地帯は民間信仰が根付かないとされているが、石仏の数や神社の数もとりわけ多く、真宗と違う民間信仰も地下水のように息づいている。たとえば「正徳二年社号帳」に記載される堂宮の中には、圧倒的に神明が多いが八幡、諏訪などが次いであり、その中に仏教的色彩強いものもある。たとえば観音、薬師、地蔵、大日、権現、十一面観音、聖観音などである。神社と称しがたい堂宮が砺波郡では 23 種 171 社存在する。郡内全堂宮の 22%にも達するとある*。

これらは修験の影響によるものと思われる。木場明志氏の考察によると「越中砺波の定着修験は、政治的理由を優越させながらも、中世までのこの地の宗教的素地や石動山を中心とする周辺とする山岳信仰との接触のうちに、三次にわたる定着の波を経て、ついに近世前半にはその形態を確立させていくのである」**

砺波市芹谷にある高野山真言宗千光寺には、石動山古縁起と酷似した縁起が残されている。これはこの地方が

* 富山県編『富山県史通史編Ⅳ近世下』「神祇信仰と定着修験」（昭和 58 年刊）P810

** 高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』「越中砺波の定着修験活動」（昭和 52 年刊）P372

石動山信仰の影響を受けていることを、物語っている。千光寺前にある和田川は放生津を経て富山湾に流れている。そこには放生津八幡宮がある。和田川は緩慢でゆったりとした流れで、中世には水運でものが運ばれた。放生津八幡宮では、全国的にも珍しい行事築山神事がおこなわれ、放生津の「足なし」、二上山の「手なし」、石動山の「口なし」と云われ、たがいに影響しあっていた。和田川の上流は牛岳であり千光寺との関わりが説かれ、河口の放生津八幡宮も石動山の影響下にあった。中世時の砺波郡は石動山との関わりは深かったと思われる。

南北朝の内乱を描いた軍記物である『太平記』によれば、建武２年（1335）11月27日、越中守護普門蔵人利清が、越中の豪族井上・野尻・長沢・波多野らの諸氏と語らい、足利尊氏の行動に呼応して、越中・越後の軍勢を集め、後醍醐天皇の越中国司中院少将定清を攻撃した。このため定清は、石動山の衆徒を頼って同山に盾籠ったところ、利清勢が大軍をもって押し寄せ、定清は戦死を遂げ、石動山にあった寺院は、ことごとく、兵火のために消失したとある*。いわゆる石動山は越中国司中院定清を、擁護するだけの力があったのであろう。

櫛瀬比賣神社のある徳大寺家領般若野荘は、この石仏の造像された南北朝期はどのような状況であったのであろうか。徳大寺家三代実定の兄弟実家の孫実春がいる。公国の子７人兄弟中の六男に当たる人物と考えられ、南朝の侍臣であったとされ、その奉書写がある。「しかし実春は徳大寺家の庶流であり、『公卿補任』にもその名が見えず、公卿の列に入っていない。したがって、これをもって直ちに徳大寺家の動きを立証することはできない。」**とされているが、中世文書の少ない砺波にとって推測が膨らむが、この地方には南朝の伝説が多いことは事実である。また井波瑞泉寺、古国府勝興寺、城端善徳寺と比肩する寺院である福岡厳照寺が寺伝によると永享２年（1440）に、本願寺５代綽如上人により、開基された。その場所が、常福寺阿弥陀如来立像が安置されていた東の庄川の中であるとされている***。

石動山と比賣神社のある般若野荘の関係は模糊として不明である。説話や伝承、そして微少の歴史的資料の憶測と傍証の積み重ね、妄想を組み合わせると、少なからず細い糸が繋がっているように思われる。今回、発見された石造物は石動山下の氷見市薮田周辺から採掘された薮田石であること、また宗教的な遺物であることを勘案すると、石動山信仰の遺品として理解して良いと思われる。これを信仰してきたこの地の祖先の心情に触れる思いがする。

（尾田武雄）

* 鹿島町史編纂専門委員会編『鹿島町史　通史・民俗編』「守護領国と石動山」P142

** 砺波市史編纂委員会編『砺波市史資料編１考古・古代・中世』「南北朝期における徳大寺家庶流の動きについて」（平成２年刊）

*** 砺波市編纂委員会「砺波市史資料編４民俗・社寺」（平成６年３月）

第6章　まとめ

平成25年4月19日、改築のため解体中の柳瀬比賣神社奥殿の基壇から、中世の地蔵5体その他の石造物が出土したという情報には驚いた。かねて万遊寺観音堂に中世の六地蔵の1体のあることが尾田武雄氏によって調査され、他の5体がどこかにあるはずだと想定されていたからである。しかし、いつ、なぜ神社の基壇へ埋められたのか。また、六地蔵以外の石造物は何なのか。謎はあまりにも多かった。

それから尾田氏の探索と西井龍儀氏の実測考察が始まった。結果は如上のとおりで、氷見灘浦産の菱田石による14～15世紀の石造物であること。それがこの地へもたらされた背景。また、明治末年の神社合祀に伴って、破損した石造物がここへ埋められたことなど、多くの事実が解明された。

神社合祀と石造物の関係はあまりにも複雑なので、その点を要約しておこう。明治39年に始まった国の神社合祀策に伴って、柳瀬村でも動きが出はじめ、42年に具体化した。同年5月から12月までの間に合祀が進むが、神社と同列に村方で世話をしていた観音堂と地蔵堂も対象となる。観音堂の御本体はそれ以前に太田万福寺へ移られていたが、その明き堂を村内の万遊寺境内へ移し、そこへ地蔵堂の六体地蔵と阿弥陀坐像、それに近くにあったもう一か所の地蔵堂の中世石仏3体を移した。一方、比賣神社奥殿改築の案が出て設計書を取りよせ、同44年1月に着工して12月に竣工した。その基壇工事の際、六地蔵のうち破損していた5体と阿弥陀坐像、また合祀された二階堂の田稲社の破損した随身や狛犬等を移して埋めたものと思われる。

万遊寺の観音堂には、残された完形の地蔵1体と、別の地蔵堂にあった中世石仏3体が祀られた。以後、毎年8月24日（地蔵の縁日にあたる）の晩に村方の世話で祭りが行われた。太田の尼寺から尼僧を招いて読経と御詠歌が詠まれた。現在地蔵は万遊寺の内陣へ移され、8月盆近くに祭りが行われている。

六地蔵は六道輪廻（天人界・人間界・修羅・畜生・餓鬼・地獄）の各界を表わす。この遺された1体は両手で香箱を持っておられ、最上階の天人界に当る。六地蔵を代表するにふさわしい。

（佐伯安一）

報告書抄録

ふりがな	やなぜひめじんじゃせきぞうぶつほうこく
書名	柳瀬比賣神社石造物報告
副書名	氷見萩田石製 中世石造物の一括発見
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大野　究、尾田武雄、佐伯安一、西井龍儀、野原大輔
編集機関	砺波市教育委員会
所在地	〒932-0393　富山県砺波市庄川町青島 401　　TEL0763-82-1904　FAX0763-82-3521
発行年月日	2016 年 7 月 29 日

ふりがな 所収名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やなぜひめじんじゃ 柳瀬比賣神社	とやまけん 富山県 となみし 砺波市 やなぜ 柳瀬 726	162086	－	36°38′26″	136°59′29″	2013.4.19～ 2013.4.29	－ ㎡	奥殿建て替え工事

所収名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳瀬比賣神社	神社	中世	－	随身坐像左大臣 1・右大臣 1 狛犬 1・阿弥陀如来像 1・円形蓮華座 1・六角形蓮華座 1・地蔵菩薩 5	萩田石の本場ではない砺波の地で中世石造物が奥殿の基礎工事で一括出土した。中世石造物がまとまって出土した稀有な例である。

調査の要約

平成 25 年(2013)4 月、比賣神社奥殿の解体工事中に基礎土中から中世石造物が発見された。石造物は、随身坐像左大臣（阿像）・右大臣（吽像）各 1、狛犬 1、阿弥陀如来坐像 1、円形蓮華座 1、六角形蓮華座 1、地蔵菩薩立像 5 の 11 個体である。同じ柳瀬地内の万遊寺には同一組成であったとみられる地蔵菩薩立像が 1 体ある。これらは 14 ～ 15 世紀に造像されたとみられ、明治の神社合祀策に伴い移動・集積され、明治 44 年建築の比賣神社奥殿の基礎に埋められたと考えられる。

本書の仕様
- 判型 …… A 4 判
- 頁数 …… カラー図版 2 頁、本文 64 頁
- 組版 …… 写真植字（13 級明朝基本）
- 印刷 …… オフセット印刷
- 製版 …… カラー図版　FM スクリーン
- 用紙 …… 表　紙　　レザック 66 四六判 215kg
  カラー図版　コート紙　　62.5kg
  本　文　　上質紙菊判　48.5kg
- 製本 …… 左無線綴じ

柳瀬比賣神社石造物報告
－氷見萩田石製 中世石造物の一括発見－
2016 年（平成 28 年）7 月 29 日発行

編集　砺波市教育委員会
〒932-0393　富山県砺波市庄川町青島 401
TEL0763-82-1904　FAX0763-82-3521

発行　砺波市教育委員会

印刷　株式会社チューエツ